

# 変化を起こせ



未来を担う  
若い障がい者リーダーを  
育てるために  
障がい当事者団体にできること



# 変化を起こせ

未来を担う  
若い障がい者リーダーを  
育てるために  
障がい当事者団体にできること

*Pushing for Change*

*The Role of  
Disabled People's Organisations  
in Developing  
Young Disabled Leaders  
of the Future*

Report written by Christine O'Mahony  
Edited by Kevin Caulfield & Tara Flood

Researchers: Christine O'Mahony and Natalie Meadows

Published January 2010

この冊子は、大阪府福祉基金からの助成を受けて作成しました。

# **Pushing for Change**

**The Role of Disabled People 's Organisations in  
developing Young Disabled Leaders of the Future**

**Published by**

**The Alliance for Inclusive Education**

**Registered Charity No: 1124424**

**© The Alliance for Inclusive Education**

**ISBN No: 978-0-9563926-0-2**

**January 2010**

## 目次

はじめに	4
主な調査結果と勧告	9
結論	13
調査結果の詳細	15
1. 若い障がい者について	16
2. 障がい当事者団体（DPO）について	26
勧告の詳細	34
入手可能な関連文献	49
参加者一覧	55
附録1 障がい当事者団体の若者との取り組み一覧	57
附録2 調査結果において言及された障がい者の一覧	59
附録3 「ビッグ・マインド・ビッグ・ライフ」イベントプログラム	61
附録4 「良いリーダー」「悪いリーダー」の資質一覧	63
附録5 質問票	65

「ほかの人の中にある一番いいものを引き出せる人のことかなと思います。その人個人の資質ではなく、ほかの人からどんなことを引き出してくるか、ほかの人が真に望むということを手助けしてあげる人。本当のリーダーになることとは、ほかの人がしたいことをできるようにすることです」 オリバー

# はじめに

## 目的と背景

この調査報告書は、「未来の若い障がい者リーダー」プロジェクトの第一歩としてアライアンス・フォー・インクルーシブ・エデュケーション（ALFIE）に委託された。

新しい世代の障がい者リーダーが指揮を引き継げる状態になれば、障がい当事者団体がその能力を培い維持することは不可能ではないとしても困難になるであろうこと、そして、障がい者の完全な平等と人権を保障する上で先導的な役割を遂行する能力に影響を与えるであろうことを、ALFIE は認識している。この「若いリーダー」プロジェクトは、この問題について発信することを始め、新世代の、未来の若い障がい者リーダー育成のための勧告を提案する試みだ。

この調査報告書には、さまざまな団体が若い障がい者を取りこみ、彼らがリーダーシップを執るように奨励しているいくつかの方法に目を向け、若い障がい者がリーダーシップについて抱いている意見や経験を掲載している。若い障がい者のために戦略的目標と活動プログラムを持っている障がい当事者団体は、若い障がい者が将来自分自身と他の障がい者のための社会変革のリーダーになるよう、彼らを励まし、奮起させていることが、今回の調査からうかがえた。

「未来の若い障がい者リーダー」プロジェクトは、ディサビリティ・リブ（LIB=Listen, Include, Build : 聴く、包含する、築く）・アライアンス のもっとも重要な本質を示している。ディサビリティ・リブ・アライアンスは以下の団体と協働している。

アライアンス・フォー・インクルーシブ・エデュケーション  
英国障害者協議会  
イクオリティ・ナショナル・カウンシル  
ディサビリティ・アウェアネス・イン・アクション  
ナショナル・ピープル・ファースト  
プレストン・ディスク  
スコープ（管理代表団体として）

ディサビリティ・リブ・アライアンス はイングランドの障がい当事者団体 200 団体の能力開発のため、イギリス国営くじベイシス基金から3年間の補助（2008年-2011年）を受けている。この取り組みは、政府の「障がい者の生涯機会の改善」の報告書（2005年）の勧告4-3（2010年までに利用者主導の自立支援センターをすべての地域に設置する）を満たすよう、また、諸団体がより効率的に持続的成長ができるよう、そして障がい者の完全な平等と人権が保障されるように社会変革を引き起こす媒体として行動できるよう、支援するものである。

「未来の若い障がい者リーダー」プロジェクトは、リーダーシップを育成しその機会を与える、実質的な意味があり重要でかつ包括的なプログラムがない状況に対応するために企画された。社会の主流では、数多くのリーダーシップ育成プログラムが存在する。しかしながら、その大半がリーダーシップの解釈を、団体やグループの運営、地域の議員になることなどに限定している。さらに、サービスや参画の機会がしばしば権力や決定権を他者にゆだねる形

で設計されているため、障がい者は自分の生活の中で本当のリーダーシップを追求することを妨げられることもある。

リーダーシップが障がい者、特に若い障がい者を含めた概念になるためには、リーダー／リーダーシップの定義が可能性のすべての範囲を広く含む必要がある。つまり、何を食べ、どこに住み、誰と友達になるかというような日々の選択や決定から、社会や学びや仕事の機会についての選択にまで広げられる必要があるのだ。包括的でより広い意味でのリーダーシップの定義は、より広範な人々にかかわり、政府が目標としている、2025年にはすべての障がい者に平等をもたらすという目標達成の手助けとなりうるだろう。

この報告書で明らかにされた所見は「未来の若い障がい者リーダー」プロジェクトの次の段階のための情報とされる。そして、二つの障がい当事者団体が今回の成果を実行に移すことになっている。プロジェクトの最終段階においては、ディサビリティ・リブ・アライアンス・ネットワークに参加している200の障がい当事者団体に向けて2011年に公開するリーダーシップの育成資源をつくり出すことになる。

## 調査方法

この調査の過程においてはさまざまな調査方法が用いられた。アンケート調査に参加した障がい当事者団体の代表たちや、一定の設定のもとでインタビュー調査または電話調査に参加した若い障がい者には、アンケートにも回答してもらった。スコープ・スクールと二つの障がい当事者団体からの参加者グループは、集団インタビューに参加した。そして、若い障がい者とその支持者が一日研修イベントに参加した。

## 「障がい当事者団体」(DPO) という語の持つ意味

障がい当事者団体(DPO)とは、障がい者の団体で、障がい者の権利を増進するために障がい者によって運営されている団体であると定義される。この報告書の目的にそって、ここでは障がい当事者団体に自立支援センター(CIL)を含めるものとする。

障がい当事者団体は、障がい者のための団体と大きく違っている。それらの団体は障がいを持たない人たちによって管理されており、障がい者の「ために」存在しているのだが、障がい者が実際に統括しているのではないことが多い。

障がい当事者団体は、障がい者の先駆的な社会運動から発生した。彼らの多くは施設から出たいと切望し、1970年代にはじめて「障がいの社会モデル」を発展させた。

「障がいの社会モデル」では、社会がどのような場面でどのようにして「障がいを生み出す」態度やバリアをつくり、それによって障がい者を正当に評価し社会の中に含めることをしていないかということに焦点を当てている。そのバリアが、私たちが権利と平等を手にすることから、そして私たちの本当の能力を発揮することから、私たちが巧みに排除しているのである。

私たちが「障がい者」について話すとき、それは、社会が障がいを生むようにつくり出した

これらのバリアに直にぶつかってしまうような不自由さや健康状態にある人のことを指している。障がい者や、当然のことながらすべての障がい当事者団体は、「障がい」は社会がつくり出したと理解し、それを政治的アイデンティティととらえ、社会変革を求める運動を行うにあたって権利をベースにした取り組みを行っている。障がい当事者団体が強くなることで、障がい者に自分自身の生活をコントロールする力を持たせ、平等な市民として社会の辺縁から主流の核心へ移行することを支援する最も効果的な方法だとみなされてきた。

障がい当事者団体は、障がい者が出会い、情報を得たり交換し、障がい者コミュニティやより広い社会にアクセスする機会を得るためにその施設やサービスを使うところだ。

障がい当事者団体はまた、若い障がい者と障がい者コミュニティの間に現存する溝を埋めることに大いに貢献している。今回の調査でインタビューした多くの若い障がい者リーダーたちが、障がいのある大人の関心や関与が彼らの自己尊重や向上心にいかに大きな違いをもたらしたかという例をあげていた。

インクルージョンと平等を求める私たちの継続的な戦いにおいて、現在と未来の若い障がい者の世代が自信を持ち、リーダーの役割を果たすことに関心を持つとすれば、障がい当事者団体と大人の障がい者が若い障がい者の人生の中で果たすエンパワメントの役割がその鍵となる。

## 政府のプロジェクト

1980年代の初頭より、障がい者は代々の政権に対して、障がい者が代表を務める団体の設立と自立生活を支援するセンターを英国のすべての地域に設置することを求めるロビー活動を行ってきた。この目標は、今では、2005年に出された政府報告書『障がい者の生涯機会の改善』の中に謳われている。そこには以下のように記されている。

### 利用者主導の団体

**2010年までに、すべての地域（社会サービスの責任を負う代議員一人の管轄する範囲と定義する）には、現存する自立支援センターをモデルとした利用者主導の団体を置くこととする。**

—2005年1月、首相の戦略ユニット—

\* 報告書全文は、以下のURLで入手できる。

<http://www.cabinetoffice.gov.uk/media/cabinetoffice/strategy/assets/disability.pdf>  
(2009年12月16日現在)

政府の「すべての子どもが重要」プロジェクトは、英国のすべての子どもに対する優先事項を以下のように提示している。

- 健康であること
- 安全でいられること
- 楽しみ、成し遂げること
- 積極的に貢献すること
- 経済的な豊かさを手にすること

若い障がい者にとって、大人の障がい者のロールモデルがないために、積極的な貢献を行

ったり経済的な安泰を遂げている自分の姿を思い描くことが困難であるのかもしれない。現在若者たちは、昔からこうだとされてきたようなリーダーシップを目指すように奨励されている。たとえば、スーパーヒーローや、大企業家、あるいはスポーツのヒーローや、フットボールのスター選手の妻やガールフレンド、スター発掘番組の優勝者、美人コンテストの優勝者などである。多くの若い障がい者にとって、これらの願いは全く達成不可能なイメージだ。私たちの国で障がい者のリーダーが成し遂げた貢献や、社会変革に関連したリーダーシップの社会的側面が強調されることは皆無である。

「26歳になるまでに、若い障がい者は他の若者たちと比べておそらく3倍以上の割合で、『私が何をしようと、私の身に起こることに何ら実質的な効果はない』という言葉に同意しましょう。社会的責任や積極的社会参加を目指した構想の中で、障がい者はそこに参画する者というよりもむしろボランティア活動の対象者として描かれています」障害者権利保護委員会\*

\*『(仮邦題) 民主主義への参加と活発な市民参画：もう一つの未来をつくる』P3 DRC 2005 ALFIEのホームページ [www.allfie.org.uk](http://www.allfie.org.uk) より入手できる。

最近の別の政府構想には、障がい児とその家族に向けたサービスを徹底的に点検するために数百万ポンドの拠出が含まれている。『障がい児が望みを高く持てるよう：家族によりよい支援を』というこの報告は、家族が法にのっとったサービスを受けようとする時にぶつかるいくつかのバリアに焦点を当てており、主な勧告は、サービスというものは、ただ予算目標によって方向づけられるというよりも、家族のニーズや要求を反映すべきだとしている。

政府は、この報告の中で、障がい児や障がいを持つ若者が効果的に参加するよい機会を支援すべきお金を制限しようとして、大きなチャンスを逃した。参加の手当は、両親や家族に対してとはっきり制限され、同じお金が障がい児や障がいを持つ若者たちの参画のために使われることはなかった。

英国の障がい当事者団体は、若い障がい者の参加の権利拡大のために力を貸してくれるよう、引き続き国際舞台に期待を寄せている。国連子どもの権利条約を英国は20年以上前に批准しており、この条約では、子どもや若者たちの声を聴くように、政府にはっきりと義務づけている。

近年批准された国連の障害者権利条約（UNCRPD）では、障がい者のロビー団体に対して、年齢にかかわらずすべての障がい者の人権を認め尊重し彼らの声が聴かれるように政府に誓約を求めるといふ、全く新しい機会を提示している。政府は2009年6月8日に障害者権利条約を批准しているが、第24条に保留を設け解釈的な宣言を出すことを選択した。これは、未来の世代の障がいを持つ学習者に対するインクルーシブ教育に向けての動きを逆転させる可能性を持っている。障害者権利条約は障がい者に何ら新しい権利を付与するものではないが、(他の条約などの中で) 現在存在している権利がすべての年齢の障がい者に平等に適用されるのを、確かに強化してくれる。

障がい者は、この重要な条約を交渉する上で中心的な役割を果たした。そして、最近の政府の後戻りを鑑みると、次の課題は、条約の中で聖域とされた教育の権利の完全履行を確保することである。私たちは、若い障がい者のためにより大きなリーダーシップの役割を発展させることを目指したこの報告書に書かれている我々の勧告が、この課題や政府の行う他の

種々の取り組みにおける完全平等を達成するための変革の動きを後押ししてくれると期待している。



## 主な調査結果と勧告

### 主な調査結果

#### 1. リーダーシップ

インタビュー調査とアンケートの回答者(若い障がい者と障がい当事者団体)の意見では、障がい者のリーダーとは、社会的正義を進展させ自分自身や他の障がい者を力づける人のことだ。

大人と若者のリーダーシップの定義の間には根本的な違いはなく、どちらも、障がい者のリーダーを次のような人だと定義していた。

- 社会的正義を促進する
- 他の人たちを力づける
- 人の采配がうまい
- 特別な個人的能力／スキルを持っている

---

「変革のビジョンを持っていて影響を及ぼす力がある人、リーダーシップと平等について、社会モデルが障がい者の助けとなってくれる一般的モデルであり、意思決定に参画する機会がその後についてくるのだということを理解している人」

---



---

「(リーダーシップは) 行動的な役割である必要はないが、日々の生活にかかわり存在感を示すこと自体がリーダーシップだ」

---

#### 2. 障がい当事者団体

未来の若い障がい者リーダーに対して、リーダーシップのスキル形成に取り組んでいる障がい当事者団体は、さまざまなレベルの貢献をして、いろいろなやり方で彼らとかがかかわっている。どんなことが良い実践を成り立たせるかについては、明らかな意見の一致はなかった。今回の調査にかかわった障がい当事者団体の26%が、未来の若い障がい者リーダーの育成に直接かかわっていなかったが、それは以下のものがないためであった。

- その業務を支える資金と資源
- 能力と、ときによってはその使命
- 若者全般とともに行う経験や専門知識
- 若い障がい者との接点

59%の障がい当事者団体が、その団体の中には若い障がい者がリーダーシップを発揮する役割がないと回答した。

#### 3. 若い障がい者

若い障がい者は、障がい者政策に非常に関心がある。

若い障がい者は、障がい者の平等と不平等を識別する力をすでに持っている、その改善に取り組むことに熱意がある。

若い障がい者は、議論の場に出す価値のある意見を持っている。

若い障がい者は、大人の障がい者のロールモデルを必要としている。

若い障がい者は、長期的なベースでかかわって支援してくれる大人の障がい者の指導者を必要としている。

若い障がい者のリーダーは、他の若い障がい者たちにとって重要なロールモデルになっている。

---

「若い人たちが物事をそのまま受け入れないのは実にすがすがしい。このような考えを周知していくことが重要だ」

---

調査に参加した若い障がい者の88%が、若者はリーダーとなりえると考えていた。  
88%は、リーダーになるためには、話せなくてもよいと考えていた。  
83%は、リーダーになるためには、すべてを自分でできる必要はないと考えていた。

---

「責任を持てる人—集団を取り仕切ることができて、みんなの考えをまとめることができる人、ファシリテーターのような人。先頭に立つ人—グループの代表や広報官。良いリーダーとは、自然にその役割を受け持ち、他の人からも受け入れられている人だろう」

---

「障がい者の権利にとっても関心があります。子どものころからずっと関心を持ってきました。差別は嫌いです。イライラします」 ケイト

**88%**の若い障がい者が、リーダーシップは分かちあうことができると考えている。

## 勧告

1. 政府と自治体は、若い障がい者を包括した関連したものになるように、社会の主流で現在行われているリーダーシッププログラムを再検討し変更する必要がある。これは、若い障がい者の意見が最高レベルで包含されることを保障するためである。

2. 障がい当事者団体を支援しその能力開発をしている政府と地域のプログラムは、若い障がい者を巻き込み支援することが最優先の課題であることと長期的な財政支援を計算に入れておくことを保障する必要がある。

3. 障がい当事者団体は、「リーダー」という語に関して、若い障がい者を包括した直接結

びつくような定義を定める取り組みをすべきである。

4. 障がい当事者団体はその文化を振り返り、その活動が若い障がい者を包括し排除しないように、組織内の実践や手順を検証するべきである。

5. 障がい当事者団体は、若い障がい者に障がい者の歴史、社会モデル、人権、平等な市民権についての情報を与えるプログラムを開発し、その組織内に若い障がい者を取り入れることが実現できるような資源を見つけて、若者たちが参加できるように先進的な計画を立てていくべきである。

6. 障がい当事者団体は、若い障がい者や、支援者、そしてまた、地域のコミュニティー団体や学校、入居施設などにも、その活動／サービスを広報するよう断固たる努力をすべきである。また、知名度を上げ、若い障がい者やその親が確実に他機関から紹介されるように、地域のサービスや若者向けサービスと連携すべきである。

7. 障がい当事者団体は、自分たちのリーダーシップを伸ばそうとしている若い障がい者と協働する方法を認識し特定するべきである。

8. ALFIE はディサビリティ・リブ・アライアンスとともに、能力育成とインクルージョンを促進するために、英国全土にわたって、若い障がい者や障がい当事者団体を巻き込んで、地域で一連の「楽しい」相談と参画のイベントを開催するための資金を求めるべきである。

9. 若い障がい者とリーダーシップについて、より詳細な調査が必要である。すなわち、入居施設にいる若い障がい者の特定のニーズを詳しく見て、より広範な背景をもちさまざまなコミュニケーション手段を使っている若者をその対象に含めた調査である。

10. ALFIE は、未来の若い障がい者リーダーを支援するガイドラインを開発し、成功事例を発表するための、障がい当事者団体のネットワーク全国大会を開催すべきである。

*76%の若い障がい者が、誰でもリーダーになれると考えていた。*

*37%の障がい当事者団体が、団体の中には若い障がい者を妨げるバリアはないと回答した。*

*「ガバナンスと仲間同士での指導・助言の過程に若者を巻き込んで」* ミロ

*「君が障がいなのではなく、障がいとは君にできないことだということを、年少の人たちに知らせてほしい」* オリバー



## 結論

リーダーシップ育成の開発や実施に、若い障がい者が含まれることを保障するためには、さらに多くの取り組みが必要であることは明らかだ。私たちがインタビューした若者のなかには、それまでに「リーダーシップ」という問題を考えるように言われた人、若い障がい者としてリーダーシップの概念が彼ら自身にどのように関係があるかを尋ねられた人は誰もいなかったということが調査から明らかになった。彼らはしかしながら、みんな、リーダーシップについて考え議論することに熱心だった。

同年代の障がいのない若者であれば手に入れられるであろうリーダーシップの機会を、多くの若い障がい者が逃している。その結果、若い障がい者は、完全な平等と障がい者の人権の保障に果たす重要な貢献をなしえていない。このことは変えていく必要がある。この報告書のためのインタビューに応じた若い障がい者のリーダーが、大人の障がい者の関心と関与のありかたが、若い障がい者の自己尊重感と向上心にどんなに大きな違いをもたらしたかという例をいくつも挙げている。

障がい当事者団体と若い障がい者の今日の関係の現実、障がい者のコミュニティの中に、若い障がい者を支援する持続可能でこちよい構造をつくる必要があることを示している。この調査では次のことが分かった。

14 団体（29%）だけが、若い障がい者に直接活動を提供しており、その団体内で若い障がい者にスタッフや役割を割いてきた。

5 団体（11%）は、福祉手当の助言や介助料の直接給付が可能となるよう支援することなどを通して、自分たちは若者たちに一般的なサービスを提供していると考えていた。しかし、それらの団体は若い障がい者に向けた専用のサービスは実施していなかった。

3 団体（6%）だけが、これまでに自分たちの活動に若い障がい者を巻き込んできていると回答した。

これらは残念な数字だが、能力開発のための出発点となるものである。私たちの調査から、障がい当事者団体には団体自体の能力を開発し、団体内に若い障がい者をもっと大きく取り込んでいく使命があることと、それを実行するには財政面での支援、動機づけ、そして専門家や資源の確保が必要だということが明らかになった。

若い障がい者の支援における障がい当事者団体の潜在的な役割はほとんど認識されておらず、その資源もあまりない。しかしながら、次世代に有益な成果をもたらすための優先事項として、障がい当事者団体の若い障がい者との協働を大事にする能力の育成には大きな可能性がある。

学習障がいでおかつコミュニケーションに障がいのある若者も含めて、すべての若い障がい者をカバーできるようなリーダーシップの定義をまとめるには、さらに作業が必要であることが報告書で明らかになった。

そして、多くの障がい当事者団体は、若い障がい者の関与とその経験を有効に活用したいの

であれば、若い障がい者との信頼関係を築くように組織内の文化や実践を振り返る必要があることも明らかになった。そのためには長期にわたる実行と変革への意志が必要になるだろう。

これは重要なことであるが、障がい当事者団体は、若い障がい者が自信を持ち、自尊感情を抱き、歴史の感覚を持つために、彼らの生活の中で重要な役割を担っている。このような役割は、次世代の障がい者が自身の権利について今以上に情報を得て、対等な市民として毎日の生活をたやすく送れるようになることを保障する助けとなるだろう。

この報告書は、若い障がい者と協働する能力を障がい当事者団体が重要な優先事項として伸ばすための支えとなるだろう。「未来の若い障がい者リーダー」プログラムの残りの部分が、障がい当事者団体に一歩踏み出してそれを実現していくよう知識と良い実践と自信を与えることを期待している。

これらの調査結果が障がい者コミュニティ全体における変革を求めるうねりを起こすことを私たちは期待している。ALFIE は、障がい者なしにそして若い障がい者を完全に包括することなしには、平等と対等な市民権を実現することは不可能であると考えている。つまり言い換えると次のようになる。

**「私たちのいないところで私たちのことを決めないで！」**

## 調査結果の詳細

### 調査プロジェクトの概要紹介

この報告書は 2009 年 1 月～3 月の 3 か月間にわたって実施された調査プロジェクトの結果を表している。この調査プロジェクトのおもな目的は、障がい当事者団体が次世代の若い障がい者のリーダーシップ形成を支援している方法を見て報告することにあった。それには、以下の事柄が含まれている。

障がい当事者団体と若い障がい者が、リーダーシップの概念をどう理解しているかを見ること

障がい当事者団体が若い障がい者を巻き込み、リーダーシップのスキルを伸ばす支援をし、そこで発生するギャップを解消するための支援を実施する公式・非公式な方法を特定すること

若い障がい者がリーダーの役割につくことを効果的に支援するために障がい当事者団体がすべきことを特定すること

さまざまな背景や経験をもつ多様な人々の声を反映させた調査結果、成果、優先事項をまとめること

### 調査方法

この調査の目的を達成するために、以下のようなさまざまな調査方法を併せて実施した。

広範囲な文献を調査した

障がい当事者団体の代表がアンケート調査に参加した

若い障がい者がインタビュー調査や電話調査に参加し、アンケート記入も行った。

スコープ・スクールの 1 グループと障がい当事者団体 2 グループがグループインタビューに参加した。

若い障がい者とその支援者が、1 日研修イベントに参加した。

調査の枠組みの中で用いられたさまざまな方法は、リーダーシップの幅広い特徴を見て、経験に基づいた発見を精査し、一つの方法を使うことによって引き起こされる任意のバイアスを最小限に抑えることを意図して用いたものである。

# 若い障がい者の見解

## 概要

調査のこの部分では、障がい者がリーダーシップについてどのように理解しているか、また、障がい当事者団体の事業がどのようにリーダーシップの取り組みにつながられているかということを知る上での手がかりを示すことを意図している。

## 方法

この調査では、計 34 人の若い障がい者が、個別に、あるいはグループでインタビューを受けた。インタビューは、電話やメール、あるいは対面で、そして、ビッグ・マインド・ビッグ・ライフという相談イベントの中で行われた。

## 若い障がい者の抽出見本

この調査に参加した若い障がい者の障がいの程度と健康状態はさまざまである。この調査は、精神保健の患者、運動障がいを持つ人、神経多様性障がいを持つ人、学習障がいを持つ人、脳性まひを持つ人、てんかんを持つ人、聴覚障がいを持つ人、ファシリテーター・コミュニケーションを使う人を対象に含め、同時にまた、黒人および少数民族（BME）や性的少数者（LGBT＝レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー）などさまざまな社会的アイデンティティを持つ人々を含んでいる。

参加者の年齢はさまざまで、大多数は 11 歳から 25 歳である。ただし、25 歳より年長の 2 人の障がい者リーダーもこの調査の対象に含まれている。その理由は、a) 2 人とも、25 歳以下の時点で若い障がい者のリーダーだったから、また、b) 2 人は、しばしば調査などから省かれてしまう障がいの集団を代表しているため、である。すなわち、精神保健の患者と、学習障がいを持つ人々の代表である。

調査の対象となった参加者は、リーダーシップの取り組みへのかかわりや参加という点で、さまざまな背景を持っていた。障がい当事者団体に以前は参加していて、自分の団体と事業計画を始めようとした人たちもいる。また、現在障がい当事者団体に参加して、障がい平等について学んだり、運動を行うスキルを磨いているという人たちもいた。

参加者のうち 2 人はスコープの寄宿生大学に行っていて、学生自治にかかわってリーダーシップを発揮し、アクセス検査に携わっていた。3 人は、スコープの身体障がいを持つ子どもたちのための「特別」学校に行っていた。

一方、障がい者のための団体（例：ウィズ・キッズ）でリーダーシップのスキルを磨き、今では全国的な運動や団体にかかわっている人たちもいる。有償で雇われている人や、ハートフォードシャー・パーソナル・アシスタント・サポート・スキームという障がい当事者団体で、実習生として働いている人たちもいた。さらに、ユース・フォーラムのメンバーである人たちもいた。

## インタビュー

23 人の若者たちは、個別に、あるいはグループでインタビューを受け、全員同じ八つの質問を尋ねられたのだが、質問の行い方は、彼らのコミュニケーションの行い方やそのために必

要となるものにならうように、異なったものになった。

彼ら若者たちのうちで、これまでに「リーダーシップ」という問題を考えるよう求められたことのある人は誰もいなかったし、「若い」「障がい者」「リーダー」という三つの言葉を一つの言い回しや文の中で耳にしたことはあまりなかった。それでも、彼らはリーダーシップについて考えたり論じたりしたいと熱心だった。

## 若い障がい者に対する質問

1. 「リーダー」という言葉は、あなたにとってどんな意味を持っていますか。
2. あの人はリーダーだとあなたが思う障がい者はいますか。
3. あなたは自分のことを「リーダー」だと思えますか。
4. 若い障がい者のリーダーなら、どんなことをその人はするだろうとあなたは思いますか。
5. 大人の障がい者や障がい当事者団体はあなたに対して、自分がリーダーであると考えられるように手助けしてくれたり、リーダーシップのスキルを磨けるように支援してくれましたか。それは、どのようにして。
6. 大人の障がい者や障がい当事者団体が何かのことであなたをがっかりさせたことはありますか。それは、どのようにして。
7. あなたがリーダーシップのスキルを磨くために、大人の障がい者や障がい当事者団体ができることは何かありますか。
8. 若い障がい者とリーダーシップに関連して、他に何かあなたが言いたいことはありますか。

ビッグ・マインド・ビッグ・ライフのイベントにやってきた11人の若い障がい者は同様の質問を、違う方法で質問された（附録3を参照）。

インタビューの全般的な結果は、以下の通り。

### 質問1. 「リーダー」という言葉はあなたにとってどんな意味を持っていますか。

回答には3種類のリーダーの特徴が表れていた。

#### 仕事・業務に基づいたリーダー

---

「グループを率いる人、代表者。自分がしている仕事に責任を負うだけでなく、自分のチームの各メンバーに対しても責任がある。何をするか、メンバーに指示しなければならない」

---

#### リーダーは変化を起こす人

---

「リーダーであることは、変化を推し進めること、立ち上がって他の人にはできないことをすること。状況を見てそれを変えたいと思うこと、そして、他の人たちが変えたいと思うことを励ますこと、他の人をエンパワーした経験を活用して、その人たちの中のリーダーシッ

プが進展するようにすること」

---

## 伝統的なイメージのリーダー

---

「強くて力があって尊敬・崇拝されている。すばやくて、激しい」

---

## 質問2. 自分のことをリーダーだと思えますか。

ほとんどの若者がこの質問に肯定的に回答し、自分が活動しているか関心を持っている問題をすすんで並べた。すべてではないがそのほとんどが、偶然にも、障がい者運動のアジェンダに密接に関連していた。

---

「はい、障がい者の権利にとっても関心があります。子どものころからずっと関心を持ってきました。差別は嫌いです。イライラします。アドボカシーの経験がたくさんあり、障がい者のチャリティの仕事をしてきました」

---

「他の人に対して最善を尽くせる人のことじゃないかと思えます」 オリバー

「障がい者のために社会を変えることに貢献したいです」 ミロ

## 自分をリーダーと認めることにちゅうちょする人もいた

---

「自分を若いリーダーだとは思いません。まだ経験が浅いです。障がい当事者団体には、若い障がい者が本当に不足しています」

---

## 質問3. あの人はリーダーだとあなたが思う障がい者はいますか。

回答は5種類に分かれた。

### 他の若い障がい者や障がいのある友達

例として、Maresa MacKeith、 Lucia Bellini

---

「Zara Todd 彼女は問題に対して情熱的で、なされるべきことを求めることに対して先進的です。自分自身そうありたいと思っているし、彼女は生まれつき人に影響を与える力があるので、代表として行動する資質があります。知性という強みもあります」

---

## 若い障がい者の生活の中にいる障がいのある大人

例として、Phil Samphire, Owen Parry, Nick Saunders, Micheline Mason, Chrissie Wilson, Chris O'Mahony, Simone Aspis, Richard Rieser, Tara Flood

#### 障がいのある著名人・政治家・スポーツパーソナリティなど

例として、Ellie Simmonds, Oscar Pistorius, Alison Lapper, Bert Massie, Tanni Grey-Thompson, Lara Masters, David Blunket, Gordon Brown

---

「Daniel Bentley は昔、このあたりでよくボウリングをしていて、北京オリンピックで金メダルを取っています。影響を受けました」

---

#### 障がいのある有名な活動家

例として、Mick Scarlet, Liz Carr, Jacqui Christy, James, Rachel Hurst, Mike Oliver, Andrew Lee

---

「Micheline Mason のような、運動を始めた人。それに、Jane Campbell や Anne McDonald」

---

#### 障がい当事者の、または、障がい者のための団体

例として、Council for Disabled Children, Priority Trust, 1Voice

---

「ALFIE のような団体の人から影響を受けました。とても経験が豊富だからです。その人たちは、どんな感じかってことが分かっています」

---

(ここで挙げられている人物の詳細については、附録2を参照のこと)

「ウィズ・キッズでは、間違っただけというものはありませんでした。誰にも笑われないし、『全く間違ってるよ』とか『社会モデルをうまく使ってない』とか言いに来る人もいませんでした」 ザラ

#### **質問4. 障がいのある大人または障がい当事者団体は、これまでに、あなたが自分自身をリーダーだとみなすことや、リーダーシップのスキルを伸ばす手助けをしましたか。**

回答は3種類に分かれた。

#### 全くなかったという強い否定

---

「そんなことはなかった。全くない」

---

大人の障がい者からの肯定的な承認・サポート・指導・励ましを受けることの重要性を強調した人もいた

---

「障がいのある大人からいっぱい励まされました。支援者からもです。他とは違うと思った

大人がいました」

---

自分や同世代の仲間を頼る方がいい人もいた

---

「自分の道は自分で拓いていく。途中で邪魔があっても、いつかはたどりつける」

---

他の若い障がい者とのつながりが、若い障がい者のリーダーを励ます／失望させる、両方で見られた

---

「はじめは素晴らしかったけれど、そのうちに、ずっとしゃべっている人や全然しゃべらない人がいて、また主流から外されているように感じて……自分たちのように自力で動けない者にとっては、他の障がいのある若者にさえもついていけていると感じることがむずかしい」

---

**質問5. 障がいのある大人や障がい当事者団体が、どんな意味でも、あなたの邪魔になったり、意欲をくじいたことがありますか。**

そのようなことが起こっていると、少なくとも一人は言い張った。

---

「はい、いつも。子どもや大人がいじめる」

---

他の人たちは、まわりの大人の障がい者に思いやりがないと感じている傾向がある

---

「送った手紙に返事をくれないとき、自分を疑うようになります。どうなっているかの説明もなく、頭越しに進められるようなひどい会合もありました」

---

*「車いすのそうじのようなつまらない仕事をいつも言いつけられた。ずっとボランティアだと思われていて、スタッフバッジはもらえなかった。スタッフメンバーだとは思われていなかった」 ケイティ*

**質問6. 若い障がい者のリーダーはどんなことをするでしょうか。**

ほとんどが、障がい者運動のアジェンダの一部の活動を挙げた

---

「若い障がい者のリーダーは、若い障がい者の意見を代表しようとするべきです。一般的に若者は平等というゴールを掲げています。若者の一般的な意見を代表しようとするべきです」

---

「自立して考えよう。自信をつけよう。考えを他の人と分かち合おう。若者であることの権

利を知ろう。他の若者に情報提供しよう。評価してもらおう。障がいとは問題ではないと考えよう。演劇を使って私たちの問題について他の人にも知ってもらおう」(ユース・フォーラムのメンバー)

---

## 質問7. 障がい当事者団体に改善すべき点がありますか。

### コミュニケーションをよくする

「関係団体の入会について、最近声をかけられたが、入会申込書に書かれた見解を表す言葉遣いや表現がとても政治的だった。すべて実際にあてはまるものだったけれど、若者が関係団体に入るのに、いくつもの信条に賛同を求めるのは現実的じゃない」

---

### 個人的な対立を避ける

「若い障がい者にとっての大きな問題の一つは、障がい当事者団体には、たくさんの個人的な対立があることだ。(いさかいの中には、) 自分が生まれる前に始まったものもある」

---

### インクルーシブなしくみを提供する

「リーダーになる前に、若者を孤立から助けたい」

---

### 柔軟性を持つ

「今日のシステムの欠陥の一つは、同じ問題に取り組むときでもさまざまな方法があることを知らせるのではなく、人々が若い障がい者を、何であれその障がい当事者団体に当てはめようとすることです」

---

「若者たちの声の中心になることだと思う」 オリバー

### 個人についての詳細な情報を保護し、社会的スティグマの再生を防ぐこと

「自分が(障がい当事者団体に)入会するとしたら、自分自身の経歴について何も明かしたくない。『マインド(団体名)のために働きたい人』より『精神保健支援の利用者』でいいと思えるかどうかわからない」

---

### 障がい・障がい者政策・社会モデルについての情報を提供し理解をすすめること

「もっと若い時に、障がいとは何であるかということを実際に理解できるように助けてもらえて、それを個人的な経験よりも大きなものにしてきていたら、よかったですらうと思います。」

障がいのために孤立してしまうこともあります。それを理解するために、自分自身を政治化する必要があるくらいです。若い世代の人たちに、あなたが障がいなのではなく、障がいとはあなたにできないことを言うのだと気づかせてやらなくてはなりません」

---

## 若者を雇うこと

「障がい者の雇用を創るためにお金をつぎ込んで」

---

## 障がい当事者団体とのかかわりを若い障がい者にとって楽しく魅力的にすること

「今何が起きているかを重視しすぎ、若い障がい者に楽しい活動を提供することより、団体の成果を出すことが重要になっている。みんな自分の時間をタダで提供しているのだから、少なくとも楽しい思いをして報われたい」

---

「直接行動に出たい人も、テーブルを囲んでいたい人もいます。それって本当に、その人がどう思うかにかかっています」 ザラ

「一番いいのは、パネルのアイデアを思いつくこと、会議に出席すること、屋上から叫ぶこと」 ケイティ

## ビッグ・マインド・ビッグ・ライフのイベント

ビッグ・マインド・ビッグ・ライフのイベントの参加者のうち11人が追加の18問の設問に回答を寄せた。参加者の回答は以下の通り。

### 第1問 誰でもリーダーになれますか？

はい：76% いいえ：12% たぶん：6% わからない：6%

### 第2問 リーダーになるためには、話せる必要がありますか？

はい：6% いいえ：88% たぶん：6% わからない：0%

### 第3問 リーダーであるということは、すべて自分でできるという意味ですか？

はい：0% いいえ：83% たぶん：11% わからない：6%

### 第4問 リーダーであるためには、信奉者がいないといけませんか？

はい：11% いいえ：39% たぶん：28% わからない：22%

### 第5問 若者はリーダーになれますか？

はい：88% いいえ：0% たぶん：6% わからない：6%

**第6問** リーダーは他の人の行動に責任がありますか？

はい：11% いいえ：0% たぶん：67% わからない：22%

**第7問** 自分がリーダーだという自覚は必要ですか？

はい：12% いいえ：82% たぶん：0% わからない：6%

**第8問** リーダーは大変な仕事をすべて自分でしなければなりませんか？

はい：22% いいえ：61% たぶん：17% わからない：0%

**第9問** リーダーは一人だけですか？

はい：11% いいえ：67% たぶん：22% わからない：0%

**第10問** リーダーシップは分かちあえますか？

はい：88% いいえ：0% たぶん：6% わからない：6%

**第11問** 良いリーダーになるための資質はなんですか？

以下に、良いリーダーの資質についての若い障がい者の考えをまとめた。回答は5種類に分けられた。

#### 社会的正義を促進する

- 地域社会に関心がある
- 運動に専心している
- 公平である
- 包括的である
- 他の人たちの代弁をすることは地域社会の声だ

#### 他の人たちを力づける

- 他人に配慮し励ます
- 大いに期待を寄せる
- 他人が目標を達成するのを助ける
- それぞれの潜在的な力を発揮するのを助ける
- 考えを共有する
- 協力的である

#### 人の采配がうまい

- 独創性を励ます
- 管理能力が高い
- 動機づけがうまい
- 何を人に頼むかわかっている
- 状況を変えられる
- チームメンバーの強みと弱点を認識している
- 人の努力を認め称える

#### 特別な個人的能力／スキルを持っている

- 知性を活用できる

決断力がある  
決然としている  
コミュニケーションがうまい  
人格者  
共感性がある  
知識が豊富  
進むべき方向が分かっている、方向性が明確  
人の話を聴く  
几帳面  
実効性がある  
頼りになる  
柔軟性がある  
礼儀正しい  
責任感がある  
率先して動く  
学ぶ姿勢がある  
努力家

#### 尊敬されている

他の人からの反応がある  
みんなが尊敬する人

#### 第12問 悪いリーダーの要素はなんですか？

設問の答えを以下にまとめた。

約束を守らない、非現実的な目標を掲げる、人の意見を聞かない、障がいがあることでその人を差別する、共産主義者、すぐに気が変わる、排他的、独裁的、新しい考えに心を閉ざしている「年寄りの」な態度、自我意識が強い、自分よりできる人が嫌いでその人を押しつける、自分で考えられない「イエスマン」、いじめをする人、知識偏重、人種や肌の色や社会と職場でのその人の地位で人を判断する、うそをつく、賞賛されたいがために多くの約束をする（が、果たさない） - 行動は言葉よりものをいうのに、人種差別をする、自分の考えを受け入れるか破滅するかを迫る恐怖政治を敷く人、自己中心的、自分はビッグだと思っている人

**悪いリーダーの例:** アルフレッド大王（訳者注：9世紀のウェセックスの王）、ジョージ・W・ブッシュ、ヒトラー、ポルポト（訳者注：1970年代のカンボジアの共産主義政治家）、ロバート・ムガベ（訳者注：1980年代のジンバブエの首相・大統領）、サダム・フセイン、スターリン

#### 第13問 若い障がい者がリーダーシップを執るにあたって、妨げになるものはなんでしょうか？

回答は2種類に大別された。

#### 外的要因

能力を疑っている人たちに対して、できるということを証明しないとイケないこと

若者に対する否定的な固定観念

心の病の問題を経験している人に対する期待の低さ

無視される一話を聞いてもらえない

年上の人たちが、自分の方がよくわかっていると思っていること。彼らが間違っていることもある。

自分が正しいのに、他の障がい者からの支持が得られないこと

象徴にされること

若い障がい者の見本にされること

当事者が主導していると公言しているのに実際はそうでない団体

財政的問題

(先生や他の大人からの) 若い障がい者への期待や意識の低さ

職場での孤立

型にはめて見られること

機器を利用できないこと

他の障がい者の対抗意識

### 内的要因

批判を怖がる気持ち

自分の能力に対する疑い

間違いを恐れる気持ち

# 障がい当事者団体の見解 有効な構造か、役に立たないバリアか

## 概要

調査のこの部分は、障がい当事者団体がリーダーシップという概念について、どのように考えているかを調査し、同時に、リーダーシップの取り組みについての諸団体の実践を検証することを目的としている。

## 方法と実例

質問票を約 300 の障がい当事者団体に発送した。質問票は、次のような事項を解明するよう考案されている。

1. 障がい当事者団体は、若い障がい者にかかわってどのような事業を行っているか。
2. 若い障がい者にかかわる事業は、障がい当事者団体のなかでどのように資金運営されているか。
3. 若者にかかわる事業は、リーダーシップのスキルを促進し発展させるために特別に考案されているか。
4. 障がい当事者団体が事業のなかに若い障がい者を参加させていないのはなぜか、その理由。
5. 異なるコミュニティや背景を持つ若い障がい者のさまざまな体験をよりよく反映させるために、障がい当事者団体は「リーダー」という言葉をどのように定義しているか。
6. 障がい当事者団体は、自団体のなかで、若い障がい者がリーダーシップを発揮するにあたって、どのようなことがバリアとなっていると考えているか。

16%の団体が質問票に記入してくれた（49 の回答を受け取った）。

## 調査の結果

質問票の結果は、以下のものである。

**質問 1. あなた方の団体では、若い障がい者にかかわる事業を何か行っていますか。**

若い障がい者と直接かかわって、若い障がい者のために専任のスタッフや役割を団体内に設けているのは、14 団体（29%）だけだった。

13 団体（26%）が、今のところ若い障がい者にかかわる特別な事業は何も行っていないと答えている。

11 団体（22%）は、介助料直接支給法を利用するなどして雇用者になるよう、若い障がい者をサポートする事業を行っており、それが彼らのリーダーシップのスキルを発展させるよう促していると考えている。

*29%の障がい当事者団体が、若者と直接かかわる事業を行っている。*

5 団体（11%）は、団体の一般的なサービスのなかに若い障がい者も含まれている、特に福祉手当の助言や介助料直接支給を利用できるよう支援することなどを通して行っていると考えている。しかし、若い障がい者に対象を特化したサービスは何も行っていない。

3 団体（6%）は、事業のなかに若い障がい者も参加していると答えている。

---

「私たちの団体には、19 歳から 25 歳の障がい当事者メンバーが数人いて、自分たちの生活に影響する戦略や政策、サービスに影響を与えるよう、事業に参画しています」

---

3 団体（6%）は、専任ワーカーやプロジェクトに対する資金がうまく確保できたので、若い障がい者にかかわる事業を発展させようとしているところだと答えた。

29%の団体が、若い障がい者と直接かかわる事業を行っている。

**質問 2. 団体で行っている、若い障がい者も対象に含む事業がどのようなものであるか、説明してください。**

障がい当事者団体が若い障がい者に提供している事業活動への参画には、少なくとも次の四つのレベルがあるようだ。

レベル 1 – 情報と助言。たとえば、子どもとその子の両親や介護者に、介助料直接支給法についての情報や助言を提供し、雇用者になれるように支援する。

レベル 2 – 中心的活動への参画。しかし、特に若者に焦点をあてた活動は行われていない。

レベル 3 – 若い障がい者を含むすべての障がい者に門戸を開いたサービス。例として、全国自立センター。

---

「情報と助言、キャンペーン、政策および調査にいたるまで、私たちの活動はすべて、他のあらゆる人々の集団に対してと同様、若い障がい者のためのものです」

---

—あるいは、特定の社会的アイデンティティを代表する全国的なネットワークを通して。  
例として、ジェンマーレスビアン（注）の障がい者のための全国友好ネットワーク。

レベル4 – 若い障がい者が参画し関与し、リーダーシップのスキルを磨けるよう、特別に考案された直接事業（例として、附録1を参照のこと）。

**6%**の障がい当事者団体が、自団体の事業に若い障がい者が参画していると言っている。

**質問3. その事業は、どのような資金で行われていますか。**

- 32% 地方自治体
- 17% 単独の資金なし
- 15% 助成金授与のトラスト
- 10% サービス料金
- 8% プライマリー・ケア・トラスト
- 6% 保健省
- 4% コネ/LSE/仕事
- 2% 会員の寄付
- 2% 内務省
- 2% スポーツイングランド
- 2% アート・カウンシル・イングランド

助成金を授与するトラストには、シティー・ブリッジ・トラスト、イギリス国営くじ、レオナード・チェシャー、NSPCC（全国児童虐待防止協会）を含んでいる。

**質問4. 若い障がい者を対象とする事業は、リーダーシップのスキルを促進/発展させるものですか。**

- 72% リーダーシップのスキルを促進させる
- 28% リーダーシップのスキルを促進させるものではない

その事業は、どのようにして若い障がい者のリーダーシップのスキルを促進/発展させるものですか。

回答者は、以下のような活動やそれらの活動による肯定的な結果が、若い障がい者のリーダーシップ育成に効果的であるであろうと言っている。

- 認定講座
- アドボカシー
- 信頼醸成
- 包括的な組織
- キャンペーン事業への参画
- 意思決定への参画
- 余暇活動/スポーツ/イベント/旅行

有給雇用  
 仲間の見守り  
 憧れをかきたてる  
 雇用者になれるよう支援する  
 自立生活スキルと雇用の訓練  
 訓練の機会  
 利用者本位の組織

**質問5. あなた方の団体が若い障がい者を対象とする事業を行っていない理由が何かありますか。**

データを分析すると、現在若い障がい者とかかわる事業を行っていないと回答した13の団体は、若い障がい者を雇用するという考えに対して積極的であることがわかった。なぜ若い障がい者に雇用を提供していないかという問いに対して述べられた理由は、財源が不足しているという答えが圧倒的だった。

---

「若者の開発ワーカーのための財源を得ようと今努力しているところです」

---



---

「私たちが行っているすべての事業に若い障がい者を参画させようと積極的に迫るということについては、まだまだ長い道のりがあると認めています。ですから、このような状況を前進させられるような提案やパートナーシップはどんなものでも歓迎したいのです」

---

「資金が不足していて、現在この分野については何らキャンペーンを行っていません」

**質問6. あなたの考えでは、障がい者のリーダーとは何ですか。**

---

「障がい者のリーダーと障がい者でないリーダーとの間には、障がい者のリーダーは今その姿になるために、より多くの差別とバリアにぶつかってきただろうということを除いて、何一つ違いはありません」

---

障がいのある「リーダー」のより望ましい定義は、大まかに四つの種類に分類される。主として、リーダーとは、次のような人物である。

社会的正義を促進する（回答者の71%が言及）  
 他の人をエンパワーする（回答者の43%が言及）  
 人の采配がうまい（回答者の10%が言及）  
 特別な個人的な資質を持っている（回答者の6%が言及）

これは、良いリーダーになれる資質だと若い障がい者が考えているところとぴったり一致している（23 頁の質問 11 を参照）。

一つの種類におさまらない論点について言及している団体がいくつかあった。

### **社会的正義を促進する**

- 平等、多様性、障がい者権利、自立生活と、人間中心の変化を擁護する
- 個人的なニーズを理解する
- 社会モデルを用いる
- 変化を起こす媒介である
- 効果的な活動家である
- 運動家である
- 自身のために声を上げ、他の人の代弁者として行動する

### **他の人たちをエンパワーする**

- ロールモデルとして行動する
- 人をやる気にさせる
- 自信を与える
- 成長させる
- 他の人たちをエンパワーする
- 仲間としての支援を提供する
- 世界を変えようと他の人たちを鼓舞する
- 他の人たちを結びつける

### **人の采配がうまい**

- 状況に対応する
- グループの指揮を執る
- 計画を立てる
- やるべきことを理解し、みんながそれに取り組めるようにとりはかる

### **特別な個人的能力／スキルを持っている**

- 熱心に取り組む
- 内から突き動かされている
- 情熱的
- 自信に満ちている
- やる気がある
- 尊敬されている
- 話を聞いてもらえる

*「障がい者のリーダーは、社会のあらゆるレベルで、すべての地域において、障がい者問題に関してだけに限らず、必要とされています」*

いくつかの回答は、リーダーシップという概念に対して、まるで異なった取り扱いをしているため、上に掲げた種類のどれにも入れることができなかつたことを言っておかなければならない。ある団体は、障がい者のリーダーについて医学モデルに基づく見解を持っており、次のように言っている。

「障がいのある人々を支援したり障がいのある人々のニーズを推進している人なら、だれでも」

別の団体は平らかな階層を持っていて、リーダーシップという考えを嫌い、次のように言っている。

「私たちは、必ずしも誰かを特別にリーダーとみなすことはしません。そうではなく、チームとしての精神で取り組み、すべての人の意見を尊重するようにしたいと考えています」

リーダーであることは、必ずしも最前線に出たり、一目瞭然で皆を仕切ることを意味しているのではないと考える団体もあった。次のように言っている。

「これは積極的役割とする必要はなく、日々の生活のなかで取り組み、今日の前にあるということがリーダーシップの役割そのものです」

ある団体は、「障がいのある」リーダーであると、ことさら認められるのは重要ではないと感じていた。次のように言っている。

「リーダーの役割を引き受けている人ということで、必ずしも障がい者であると強調することはない」

**質問 7. あなたの団体のなかで、リーダーシップの役割を担っている若い障がい者はいますか。**

25% はい  
59% いいえ  
16% 回答なし

*障がい当事者団体のうち 25%で、若い障がい者がリーダーシップの役割を担っている。*

#### **若い障がい者によって取り組まれているリーダーシップ活動の割合**

若い障がい者にかかわっている団体のなかで果たしているリーダーシップの役割の例として言及されている活動を以下に示す。回答者がこれらの活動について言及した頻度についても、%で記している。

46% 運営委員会／運営グループ／ユース・フォーラム／理事の会員である  
18% 有給の被雇用者／実習生／ボランティア  
12% 訓練／サービス／相談を提供している

- 6% 国の政策決定
- 6% キャンペーン事業
- 6% 資金調達の応募作成
- 6% 日々の暮らしを行うということそれ自体で、ロールモデルとなる

**質問 8. あなた方の団体のなかで、若い障がい者がリーダーシップの役割をとるためのバリアとなるのは、どのようなことですか。**

若い障がい者に対して自団体のなかにバリアはないと述べた団体のうち 28%は、現在若い障がい者と共に事業を行っていない。

団体のうち 4%は、この質問に対して、全く回答を書いていない。

*団体のうち 37%が、自団体のなかで若い障がい者に対してバリアとなるものはないと述べている。*

他の回答者のあげたバリアは、大部分は、次の三つの種類に分類される。

種類 1—若い障がい者の内に根付いている、内的なバリア

回答者のこのグループは、若い障がい者は、やる気や自信、技術、経験、興味、知識（例として、お互いの持つ障がいによってアクセスのニーズが異なるということに対する理解）が欠けており、それがリーダーシップに対するバリアになっていると感じていると述べている。

---

「私たちは機会均等の雇用者です。私たちの人材登用の努力に対して、若い障がい者からは、ほとんどまったく反応がありません」

---

種類 2 – 組織のなかにあるバリア

回答者のこのグループは、バリアは団体の構造そのものに起因すると述べている。

---

「リーダーになりたいと望むかもしれないような若い障がい者に対して、秩序だった支援や、プラン作成、一連のプロセスなど、何一つありません」

---

種類 3 – 社会的差別に根差すバリア

このグループは、全般的な社会的状況のなかに根差すバリアについて注目している。

---

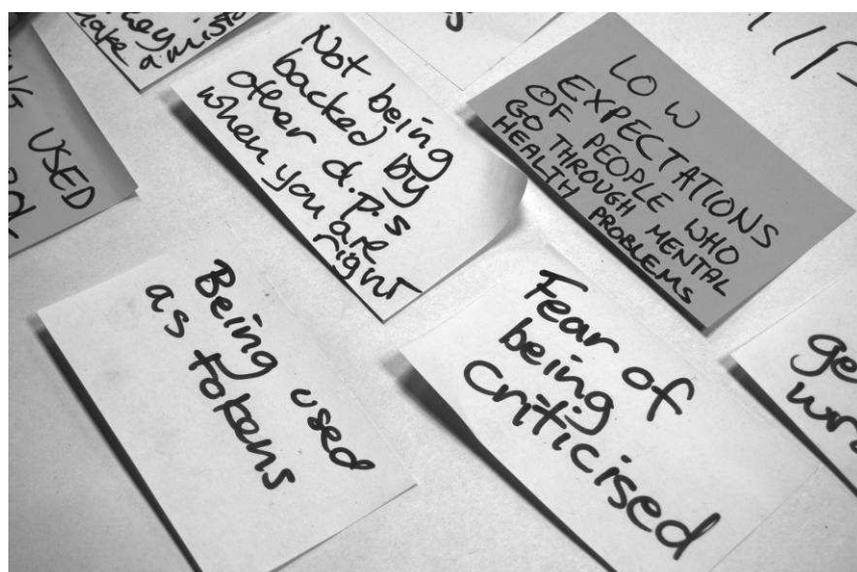
「どこにでもよくある差別です。若いリーダーを訓練する資源などがまったくありません」

---

「地方においては、公共交通機関が不足しているため、ワーカーもボランティアも大変な困難を覚えています」

---

「私たちは政治的団体であるので、若者はそういう団体に関与することに対して積極的になるには、バリアがあるのだと思います」



## 勧告の詳細

この調査は、障がい当事者団体が若い障がい者の生活のなかでより戦略的かつ支援的な役割を果たせるよう、開拓すべき分野を確認するための、最初の第一歩となるものである。私たちは、この調査結果から、参加者から寄せられた意見もいくつか付して、以下に掲げる10項目の提言を作成した。

1. **政府と公共団体は、若い障がい者を参加させかかわらせることができるよう、現在主流のリーダーシップの取り組みを精査し変革する必要がある。これは、若い障がい者の意見を最高レベルで取り入れることができるようにするためである。**

入手できる資料や障がい当事者団体や若い障がい者へのインタビューを見ると、主流のリーダーシップの取り組みは、若い障がい者を当たり前のこととして活動に引き込み参加させるためには、多くの課題があることが明らかである。（49頁の関連文献参照）

主流の分野においては数多くのリーダーシップ開発プログラムがあるが、その多くはリーダーシップというものの解釈を団体やグループを運営したり、地方自治体に立候補するなどといったことに限定している。また、権限や意思決定が他者にゆだねられていることがほとんどであり、サービスや参画の機会もそのように構築されているというなかで、障がい者が自分たち自身の生活のなかで本当のリーダーシップを得ようと努力するのを妨げているのも事実である。

参加者のなかには、リーダーシップの取り組みへの参画のバリアとなるのは、若い障がい者の側にあるのではなく、彼らの生活が組み立てられているところによるのである。たとえば、ほとんどの生徒はたくさんの仕事量を与えられていて、経済的に浮かび上がっていられるように悪戦苦闘していると認識している、と述べているものもあった。バリアは、時には、若い障がい者の生活の「管理者」、たとえば若い障がい者のニーズを満たす責任を担っている人などによってつくられ維持されていることがある。

社会保障体系のなかで制度化された差別もまた、若い障がい者のリーダーシップを発展させる上でのバリアをつくり出している。例として、アクセス・ツー・ワーク資金は、受託者やボランティアには利用できない。受託者の職はリーダーシップのスキルを獲得し実践するのに役立つものであるのに、そういうことになっているのだ。

多くの回答者が、アクセスの問題と、複合的な社会的アイデンティティーによって悪化させられる差別について、注目している。社会的アイデンティティーを他にまた併せ持つ若い障がい者は、身体障がい者差別や、年齢による差別、性差別、同性愛者に対する差別、人種差別や、教育上の差別など、それぞれにバリアをつくるような差別をいくつも重ねて受けていた。

---

「カミングアウトしていません—女性同性愛者、男性同性愛者、両性愛者や性転換者（LGBT）に対して、すべての年代において、今もなお多くの差別があります」

---

---

「私たちは、仲間の話に耳を傾けるよりも、学ぶことにもっと時間がかかるのです（障がい当事者団体の回答）」

---

これらの見聞は、きちんと構築し、しっかりとした非差別戦略を推し進めていくべきであり、そのために、障がい当事者団体を含む公共団体の力が必要である。

**2. 障がい当事者団体を援助し構築する立場にある政府と地方の主導で、「若い障がい者」を参加させ支援することは、重要な優先権を持たせるべきことであり、長期にわたる資金援助に盛り込むと保証することが必要である。**

障がい当事者団体は、外部の資金提供者を維持するために、常に優先事項を定め自団体を組織化しつくり変えるべきプレッシャーを受けている。そういうわけで、多くの当事者団体にとって若い障がい者と共に活動を行うことがこれまで優先事項ではなかったということは、驚くべきことではない。政府の主導では、障がい者の生活機会を向上させようとする趨勢が増大しているにもかかわらず、障がい当事者団体と若い障がい者に対して重点を置いた戦略的な資金援助を行っていない。全体として、多くの団体は若い障がい者を参加させようとする際のバリアについて、次のように述べて明らかにしている。

障がい当事者団体には、この事業を支えるだけの資金と資源が、不足している。

障がい当事者団体には、一般に、若い障がい者とかかわった経験や専門知識があまりない。

障がい当事者団体には、若い障がい者に接する機会があまりない。

障がい当事者団体には、若い障がい者を活動に巻き込む動機があまりない。

若い障がい者と共に実際に活動を行っていたり、これから一緒に活動を行いたいと考えている団体には、考慮すべき多くの問題がある。

障がい当事者団体が受け取る資金の大半は、地域のサービス内容合意書を通してであるにせよ、地域の教育や子どもに関するサービスと協働してのものであるにせよ、いずれにせよ地方自治体からきている。

多くの団体において、団体が資金を得ている問題に対しての事業を行うことしかできず、一貫して行って発展させていくことが必要な事業に対して、資金の提供が始まったり終わりになったりするのに合わせて常にやりくりしなければならない状況にある。もし本気で若者とかかわる事業を構築しようとするのであれば、長期にわたる戦略を打ち立てなければならない。私たちは、この場合、何人かの若者の成長する過程のある一定の期間に、3年間限定のプロジェクトを行って、望ましい長期的な成果が得られるだろうと期待するわけにはいかないのである。

必要なのは、短期的目標を掲げ短期間の取り組みを支えるようなものではなく、幾世代も続けて若い障がい者がリーダーシップを発展させることができるよう、それを支えることができるような、よく練られた戦略的な事業計画であるということを、調査結果は示している。

調査を行ったうち8団体は、単独の財源を全く持たず、中心財源からできる限りのものを提供していた。5団体は、事業で得た料金を若者との事業を発展させるために使っていた。障がい当事者団体が若い障がい者とかかわる事業を行うために申し込むことができる資金を獲得するための体系的な道筋は、全くないようである。

このため開発事業は一貫性に欠け、計画を立てるのが難しい状況にある。というようなことで、若い障がい者は、サポーターやロールモデルになってくれるような、年長の障がい者に接するような機会が十分に与えられていない。

*「私は、ウィズ・キッズに熱中してしまいました。だって、私のアイデンティティーをすべて受け入れてくれたし、何より重要なことに、私はここではまず若者でいることができたのです」 ソラ*

### 3. 障がい当事者団体は協力し合って、若い障がい者にとっても意味のある、インクルーシブな「リーダー」という言葉の定義を打ち立てるよう取り組むべきである。

若い障がい者は、みんなのためにすべてのことを考えてくれる、孤立した存在の人というような、伝統的なリーダーのイメージには満足していない。また、同じような経歴で同じような教育を受け、同じ階級にいる人たちのなかで、誰かが「よりリーダーに向いている」という考えも喜ばない。

---

「大人がこうあってほしいと思うことではなく、本当はどういうものであるかということを書いてください」

---

調査では、たとえば、個人的な支援者や、協力者や大人たちとかかわって、自分たちのニーズについて、支援してくれる人たちを教育するなどのために、多くの若い障がい者は、リーダーシップの取り組みを行わなければならないということが指摘された。そして、このように行えば、言語コミュニケーションを持たなかったり重篤な学習障がいがある場合も含め、あらゆるレベルの障がいや健康状態にある人々の内にも、能力あるリーダーを生み出すことができるとの主張がなされた。考えを（どのような手段を用いても）やり取りし、他の人たちにその考えを受け入れてもらうような能力が、キーポイントだ。

「あなたは自分自身のことを、リーダーだと思えますか」という質問に対して、多くの若者が積極的に答え、自分たちがそれに基づいて行動しているとか興味を持っているというさまざまな関心事をためらうことなく記入していた。それらの関心事の全部ではないけれどその多くは、障がい当事者団体にとっての関心事と密接に関連していた。

---

「例外なしの若者のリーダーシップということで、若者として、より多くの機会が私に与えられます。研修や障がい者アクション研修です。相談事業が若者がリーダーになろうとするのを支えてくれます」

---

ある参加者は、この質問に「いいえ」と答えたけれど、その後、自分たちがリーダーシップの取り組みを行っている多くの例を確認することになった。リーダーシップという概念について、彼らが一度も考えたことがなかったのは明白である。そして、それが参加者からの一般的な回答であった。

ある回答者は、障がい者平等までつなげていきたかったのだけれど、自分の持っている精神保健の障がいに強く結びついた心の傷を抱えているがために、「障がいのあるリーダー」であると認めることを引き受けるのをためらっており、自分のリーダーシップは弱体化してしまうだろうと感じていた。

*「リーダーは責任を受け、すべての人々を引き込み参加させるのです」* パトリック

異なった障がい集団からやってきた障がい者は、明らかに差別と悪いイメージに悩まされており、それが多くの異なったレベルにおいて、排除につながっていた。

「注目されている」けれど必ずしも障がい者問題を擁護しているというわけではない障がい者と、障がい者の権利を促進するために先頭に立って進む障がい者を区別している人々もいた。

---

「私はリーダーにはなりたくない。有名人になりたいんです」

---

障がい者のリーダーは、障がい当事者団体のなかだけでなく、社会のあらゆるところで必要とされている。若い障がい者がすべて障がい者の問題をリードしたいと思う必要はないけれど、それでも大きな希望と自分の人生の目標を持っている。障がい当事者団体は、彼らが技能を磨き、自分の可能性を最大限に実現できるよう、支援することに、常に関心を寄せるべきである。

若者の多くは、リーダーシップの活動を、障がい当事者団体の課題の一つだと表現していた。程度の差はあれ、彼らは行動一時には、直接行動一を起こすことに乗り気になっていた。そして、若い障がい者のリーダーが自分たち自身や自分たち独自の考えの代弁者として行動するだけでなく、障がい者のコミュニティー全体に対して可能な限り責任を負うべきであるということをおおむねわかっていた。

変革を起こすという点においては小さなものに思えるような活動もあるかもしれないが、リーダーシップを執り、他の人たちを代表するということの影響は、個人にとっては非常に大きなものとなりえる。その行為を行う人の自信と自尊感情を高めてくれるのだ。寄宿学校では、そこで長い間行われてきた慣例に挑戦することは小さな問題とはいえない。たとえばパーソナルケアなど、これまであなたが頼ってきた人たちを怒らせてしまう危険を冒すような、大変なことになるかもしれないのである。

---

「昼食のときに苦情を言ったんです。－コックのところに行って、僕や他の人たちのために予備の食事をください、金曜日に魚を出すのはあまり人気のないメニューです……とお願いしに行っただけです。彼らは僕らに何か別のものをくれたし、何か別のが欲しいと言う人には何か別のものが出してもらえたけれど、別にそう言わない人には、金曜日の魚料理が出ました」

*\*訳者注：キリスト教のカトリックの信者には、「金曜日は肉を食べない」という決まりがあり、肉の代わりに魚料理を出すことになっている。*

---

障がい者や障がい者の団体にとっての問題は、今皆が思っているリーダーシップやリーダーたるものの条件が、私たちのコミュニティの多様性をきちんと反映しているかということである。

*「誰か責任を取ることができる人－グループの人々のお世話をし、みんなの意見をまとめてくれる－ファシリテーターみたいな人」 アノン*

たとえば、障がい者は自らのリーダーシップのスキルを動作や身振りを通して表現するかもしれない。もちろん、コミュニティとして、私たちは、どんな人も排除せず、すべての人にとって利用しやすいようにと、いつも懸命に努力している。そうすると、私たちは現在一般に考えられているようなリーダーシップの定義をもっと広げて、私たちが共通して誓約としている機会均などを反映させるよう、努力を集中させなければならない。

若い障がい者がリーダーシップや政治に関心を示さないという考えは、自分がリーダーであると思うかどうかと問われたときの若い障がい者の答えのなかで、強く反論されている。

この調査から、障がい者のリーダーとは「社会正義を促進し、自身や他の障がい者をエンパワーする人」であると結論を下すことができるであろう。これは、調査で質問をした、障がいのある大人や若者双方から得た、一般的大多数の意見である。

この定義は、言語を持たず重篤な学習障がいのある若い障がい者に対してもうまく機能する。社会には彼らの「スキル」がなかなか認められないとはいえ、多くの障がい者が、動作や身振りを使って、周囲の人たちに、好みや選択、あこがれを示すことによって、リーダーシップの取り組みをいつも実際に行っていると主張することができるであろう。

彼らの願いが実行され彼らのリーダーシップに人々がついてきたときには、彼らは勇気づけられ、他の障がい者を励ますものとなりえる。障がい当事者団体と若い障がい者が一緒になってもっと組織化がなされれば、この定義を具現化し深化させてくれるかもしれない。

大人の障がい者と若い障がい者の意見の間に、リーダーシップの定義に関して全体的な鍵となるところでの根本的な違いは、何もない。

これらの調査結果は、多くのレベルにおいて、一般に認められたリーダーシップの理解を支えるものである。すなわち、何を着るか、何を食べるか、どのように支持援助の資源や時間を使うかなどといった選択のコミュニケーションから、政治家の選択や、大きな国際企業の経営といったことにも及ぶ。

---

「僕は、最高経営責任者とか、それ以上の大ボスになれるといいな。ラジオの仕事をしたい。ラジオ放送局の大ボスになりたい」

---

---

「若い障がい者が成功していく場面を見たいと思う。隔離されたところで意見を言っているのではなく - 障がい者のものの見方だけではなく。若者の声が社会のなかで耳を傾けられるようにならないといけない。社会の構造を変えて、誰をも排除しないインクルーシブな社会にしていく必要があるんだ」

---

「変革に向けてのビジョンと影響を与える力。リーダーシップは、異なる集団の間の協力を得ることを含みます」 ミロ

#### 4. 障がい当事者団体は、自分たちの活動が若い障がい者を参加させ排除することがないように、団体の文化を見直し、団体内の慣行や手続きを精査すべきである。

多くの回答者が障がい当事者団体がどんなものであるか、どのように団体が構築されているか知らないと述べていた。このために、若い障がい者の参加が排除されたり、意欲がそがれている。

たとえば、理事会と理事たちが普段から若い障がい者に自分たちのことを決めさせるようにしておかなければ、理事会と理事自身がバリアとなってしまうかねない。若い障がい者は、次のような意見を支持している。

---

「障がい者団体のほとんどは、若者の事業を、若い障がい者に今何が必要か聞くというより、自分たちが若かった頃に必要とした／欲しかったというものの枠組みのなかで、行っています。多くの団体が設立された頃から若い障がい者が体験してきた経験は、今や大きく変わってきているのです」

---

---

「理事になるという考えは、若者にとって魅力的なものではないようだ。というより、このことに関しては、誰もがそうなのかもしれない」

---

「議長や会計の役割とかいうものを全部、彼らは説明してくれなくちゃ。だって、彼らが何について話しているのか、半分くらい私にはわからなかったんですもの」 マレッサ

浮き彫りになった問題は、以下のことを含んでいる。

若い障がい者とかかわって事業を始めるときには、ここに彼らがいてほしいとあなたが思うところから事業を行うのではなく、若い障がい者から出てくるものから事業を行わないといけない。

若者は、大人たちが「好ましい」と思うような言葉を使わないことがよくある。それでも、他のコミュニケーションのやり方と同じように、価値あるものなのだ。

専門用語をやめる、物事をかみ砕く、わかりやすい英語を使う。

若い障がい者は、自分たちの頭越しに話をして物事の説明を行わない大人たちの態度によって、無力感を味わされる。

大人の障がい者たちの中にある、昔からの敵対意識は、未来の若い障がい者のリーダーとなりうる人たちを戸惑わせがっかりさせる。当初の意見の不一致は、若い障がい者にとって関連がなかったり関心がないことであるのに、「どちらか一方の側につく」ことを期待されていると感じることがあるのだ。

団体組織がすべての人を含めているか、確認しなさい。柔軟でありなさい - 若い障がい者を参加させるよう、多様なアプローチを用いなさい。

あなた方の若かった頃と、問題は必ずしも同じではないことを忘れないようにしなさい。

すべての人を仲間に含め、中立的なアプローチを用いなさい。

若者のなかには、大人の障がい者は一度も自分たちのやる気をそいだことはないと感じている人もいたが、やる気をそがれるようなことがあったとむきになっている人が少なくとも一人いた。そして、周囲の大人たちは思いやりがないと感じている人たちもいた。

---

「ひどい集まりもあった - 彼らは、何が起きているか説明もなしに、僕の頭ごなしに話を進めていった」

---

ある障がい当事者団体は、自分たちの団体のなかでリーダーシップにかかわりたいと望む若者は誰でも「誰もがするのと同じ過程をじっくりたどる - 最高責任者に対して正式なアプローチを行う」べきであると述べて、若者をひきつけるための戦略を調整する必要があると気づいていないことを露呈した。

このような正式な手続きは、これらの組織がどのようにして動いていくのかまだ学んでいなかったり教えられていないような若い障がい者にとって、利用しやすいものではないだろう。

さんざん白い目で見られてきたと感じている、特定の障がいグループに属する若い障がい者のなかには、自分をさらけ出すことの恐れが問題となるかもしれない。

---

「私は自分が社会の本流の一員になることもできる、つまり、もし私が自分に関する情報を公にしようというのであれば、社会ののけ者にされることはないだろうということを知っています。自分が障がい者だという事実を自分で言い触らさなければ、日常生活を送っていただけるのです。障がい者であることがはっきり目に見えてわかる人には、このような選択の余地はないでしょう」

---

「やりたいことは状況を変えることなのに。障がい者が自分たちで争っているのを見ると、戸惑ってしまいます」 ザラ

**障がい当事者団体のなかには、若い障がい者にかかわっていくという気概を持っていないところもある。**

これは資金調達の問題と密接に関係しているのだが、私たちの社会にもともと存在している、若者の関心事を無視したりほとんど顧みないような「大人主義」とも関係している。多くの大人は、若者が自分たちと一緒に働くことに興味を持っているとか、一緒に働きたいと思っているとは思わないのである。

そんな大人たちは、次世代の人たちを「ぐずぐずせずにやるべきことをひたすらやる」だけの状態に放置しておく影響について考えることをしない。大人の障がい者が若者に対する態度は、概して、他の大人たちと全然変わりにない。だから、次世代の障がい者のリーダーのために彼らが行っている計画づくりのなかで邪魔だてをしているものが何であるか、考える必要がある。

付け加えて言えば、障がい当事者団体は、若い障がい者を参画させようとする自分たちの動機づけについて、よく考えてみる必要がある。つまり、若い障がい者にとって何が問題であるかを知り、それに取り組むという、純粋な欲求を自分たちが持っているかどうかを確かめなければならない。若者は、自分たちの見方やスキルが尊重されるということを大人たちが明確に示さないときには、とてもうまくそのことを察知する。

**障がい当事者団体は、若者にかかわる経験や知識を欠いている。**

より年長の世代の大人の障がい者たちの多くは、隔離して施設に入れられたり、自分たちの生活のなかに子どもを入れることをほとんど禁止されていたかもしれない。結果として、彼らは、親戚の子どもたちや若者とも親しくかかわったことがほとんどないのかもしれない。

これはつまり、大人の障がい者のなかには、若い障がい者とながりのない人もいるだろう、特に若者の経験が彼らと大きく異なっているところではつながりを持っていないだろうということの意味している。大人の障がい者には、若い障がい者が提起する、メインストリーム

の社会のなかでぶつかっているバリアを十分に理解できず、彼らの話をどのように前向きに聴いていけばいいのか、どのように彼らを支えていけばいいのかわからず、途方にくれているのかもしれない。そして、大人の障がい者がつながることをしないために、その影響で、若い障がい者はますます話をしなくなり、信頼心が薄れてしまう。お互いに離れていた方が楽だと、両方とも感じているのかもしれない。

「多くの団体が設立された頃から、若い障がい者の体験することのなかで、たくさんのごとがとて大きく変わってきたのです」 ザラ

さらに、多くの当事者団体は、児童保護の法制や政治についてよく知らず、資金や資源、たとえば犯罪記録局のチェックを入手するための資金や資源が乏しい。このために、若い障がい者にかかわる事業を行う見込みが減じているのかもしれない。

多くの障がい当事者団体には、若者のための専任のワーカーがいない。そのため、若者にかかわる事業はみな、時間と資源をどれだけそこに傾けることができるか、スタッフ個々人の能力に任されてしまう。専任のワーカーを任命することは、未来のある若い障がい者のリーダーのニーズに対して考え行動を行うように、スタッフ集団の全員を教育し参画させる、よい機会になるかもしれない。しかしながら、団体のなかで専任のワーカーを「ぐずぐずせずひたすらやるべきことをやる」ままに任せておこうとする傾向を防ぐために、トップからおりてくる誓約が必要である。

こうした事情にもかかわらず、当事者団体が若い障がい者をどうやって参画させようかと熱心に考えているという多くの証拠が見られた。

5. 障がい当事者団体は、若い障がい者に障がい者の歴史や、社会モデル、人権や平等な市民権について伝える戦略的なプログラムを作成して、若い障がい者を参画させるよう積極的に計画を立て、団体のなかに若者の参加を引き起こすような資源を探すべきである。

回答を寄せた多くの団体は、障がいの社会モデルについては言及していなかった。これはそれらの団体が社会モデルを完全に受け入れてはいないことを明らかにしているものなのか、それともそれがもはや今日的な意味を持っていると思われていないからなのか、はっきりしない。

イングランド北西部圏障がい者連合は、若い障がい者とかわる事業を行う上での有益な情報を与えてくれるDVD（「若い障がい者のフォーラム—私たちの人生、私たちの言い分！ 仲間による相談相手 - よき実践ガイド」）を制作した。

「理解しようとするれば自分も政治化しちゃうって感じた」 オリバー

若い障がい者は、支援してくれるような大人を探す際、障がい者「の」団体と障がい者「のための」団体を必ずしも区別しない。障がい当事者団体は、権利についての理解や障がい者運動の歴史、障がいの社会モデルを、人々の学習の要求を満たすように楽しく伝えるには、時間も資金もかかると認めないといけなくなるだろう。

---

「僕は、障がい児のチャリティー活動（ウィズ・キッズ）を通して、障がいていうことに参加するようになった。はっきりと障がいに関することに僕がかかわるのはそれが最初で、でも、特に若い障がい者にかかわることではなかった（車椅子ユーザーだけ）。それで僕は障がい平等に興味を持つようになった - 究極の目標にではなく、若い車椅子ユーザーとして - それが僕をリーダーシップに向かわせるようになった」

---

若い障がい者にとっての問題は、必ずしも大人の障がい者にとっての問題と同じものではなく、また、現在大人となっている人が若かった頃の問題と同じというわけでもない。しかしながら、それは若い障がい者が社会の変化について関心を抱いていないということではない - ただ彼らは、違う時代の違う見方をしているということだ。

---

「若い障がい者のなかには、（年長の人たちと）同じような情報を得ることができなかったためにリーダーシップのスキルを磨くのを妨げられた人たちがいるかもしれません」

---

障がい者運動のなかに現れてきた「英雄」の多くは特別支援学校で育てられてきていて、分離教育を直接経験すると、若い障がい者のリーダーが、メインストリームの学校のなかで実は分離されているかもしれない若い障がい者たちよりも、抑圧をよりたやすく認めることができるかもしれないと論じられることがある。

---

「もっと若いときに、障がいとは何であるかということを実際に理解できるように助けてもらえて、それを個人的な経験よりも大きなものにできていたら、よかったですらうと思います。障がいのために孤立したり孤独になったりすることがあります。それを理解するために、自分自身を政治化する必要があるくらいです。若者には、あなたが障がいなのではなく、障がいとはあなたにできないことを言うのだと気づかせてやらなくてはなりません」

---

私たちは、若い障がい者に、彼ら自身の人生経験にも関係する社会モデルの全体像から得られる情報や知識を提供することは、彼らの自己尊重感を増し、インクルージョンを推し進める上で、有益であると、結論を下すことができる。

6. 障がい当事者団体は、地域社会の団体や学校や入居施設を巻き込んで、自分の団体や、若い障がい者や彼らの仲間に対する活動／サービスを広報するためにがんばるべきである。

また、社会事業やユース事業と連携して、それらのサービスのことを皆に知らせ、若い障がい者たちと親がサービスに照会できるようにしなくてはならない。

多くの障がい当事者団体が、個々の若い障がい者とのネットワークや交流を持っていない。地域の学校や、「特別支援」学校や、通常入居施設で世話を受けているような若い障がい者や、若い障がい者がいるような他の多くの社会環境との間に、多くの団体は関係を持っていない。

特別支援学校と仕事上の関係を発展させ、学校のなかにいる若い障がい者と対人関係を築き上げることが大切だ。特別支援学校のなかでインタビューをした若い障がい者たちは、大人の障がい者のロールモデルとなる人たちと接したことが全くなかった。

児童保護法制が存在しているために、若者の生活のなかにいる監視者（例として、先生、両親、ユースワーカーなど）の許可がなければ、若者との間に関係を作っていくことが、どんな大人にとっても、以前より難しくなっているだろう。

このことは、若い障がい者にかかわる事業を発展させようとしている障がい当事者団体にとって、困難をもたらしている。学校は周囲と分離されがちであり、時に障がい当事者団体がかわってくることに抵抗することもあるし、また、障がい者ではない大人には、しばしば若い障がい者の生活のなかにある、大人の障がい者とのかわりが見えていない。

若い障がい者のなかには、コミュニティの特別のニーズを援助するために設けられたコミュニティ組織を利用したり、そこに参加する人もいるかもしれない。この問題は、障がい当事者団体を含めて、学校やコミュニティに根差した団体との関係を構築するなかで解決に向けて動き始めることができるかもしれない。

## 7. 障がい当事者団体は、若い障がい者にかかわり彼らのリーダーシップを発展させるような事業を行うために、いくつかの方法を評価し特定すべきである。

調査の結果から明らかになったが、多くの若い障がい者は、自分を一貫して支えてくれる、大人の障がい者の助言者がいればいいと思っている。

*“若者の声が、社会のなかでもっと耳を傾けられるべきです。私たちは、社会がよりインクルーシブで誰をも排除しなくなるよう、社会の構造を変化させる必要があります”* オリバー

### 若い障がい者は、大人の障がい者のロールモデルを必要としている。

インタビューに答えてくれた若い障がい者たちは、自分たちを元気づけてくれる大人が「すぐそば」にいてくれて、長期的に話を聞いてくれると、何度も繰り返して話した。話題になっているその大人が、自分がかかわっている若者に対して自分がどれだけ重要な存在となっているかを認識していなくても、それは別にどうでもいいようであった。

若者にとっていちばん役に立つのは、その若者にスキルや能力があると信じる人となり、そう思っているということを本人に話すことだ。特に定期的に連絡を取らなくても、若者が特

定の大人に自由に会えると感じることが重要なのだ。交流が特に計画されていなかったりあまり確実でなくても、少なくとも一人の大人が自分のすることに対して、ほのぼのと人懐こい関心を寄せてくれ、求めれば助言や支援を与えてくれると感じられれば、若者が自分のリーダーシップに自信を持つために、とても役立つ。

「彼はいつも、教育について私の意見がほしいから、そこにいてほしいと私に頼みました。彼が言うには、体制のなかで悪戦苦闘してきた若者がいなければそれができない、そして、私はそれについて話をする事ができるというのです」

若い障がい者の両親はしばしば孤立しており、自分のもとにいる若者のために大人のロールモデルを敏速に探し出してくることができないかもしれない。若い障がい者は大人の障がい者をどうやって探したらいいのかわからないことが多い。インタビューした人のほとんどは、計画してというよりむしろ偶然に、励まし勇気を与えてくれる大人の障がい者に出会っている。全体的に見ると、若い障がい者は障がい当事者団体があることや、そこで何をやっているかを知らない。

若い障がい者のリーダーにとって、他の若い障がい者とのつながりに励まされることもあれば、幻滅させられることもあるということ、他の若い障がい者が自分の生活をもっと大きくコントロールできるように励まそうとするときには、励ます側の若者も支援を必要とすることが、明らかになった。

---

「とても難しい。というのは、僕は、若い障がい者全員に障がい者の権利を得るために戦ってほしいというわけではない。だけど、社会が障がい者に与えてくれるパンくずにそんなに感謝するなんて（そんなこと僕はみんなにしてほしくない）—彼らは大騒ぎはしたくない—身の程を知ってるんだ」

---

若い障がい者は、障がい平等と不平等をおそらくさまざまなレベルでたやすく識別することができ、不平等に対して異議申し立てをしようと熱心に取り組む。しかし、若い障がい者の関心を引く同じ取り組みがすべての人を満足させるわけではないだろう - 柔軟な考え方や楽しい活動の方が若者をより引きつけるだろう。

標準的な障がい当事者団体の委員会や多くの障がい当事者団体の組織構成は、結局のところ何の報酬もなく自分の持つ限られた自由時間をささげることが要求されることになる若い障がい者にとって、魅力的な選択となりそうにはない。

---

「若い障がい者にとっての問題がどのようなものであるかと耳を傾けて彼ら自身の考えを発展させていくというよりも、むしろ若い障がい者に対して望むことを非常に厳しく出されると、がっかりします」

---



若い障がい者とリーダーシップについて将来別の調査が行われるときには、そのなかでしっかり追及していくべきことである。

この調査は限られた仕事であったが、上記グループのなかに入る多くの若い障がい者がしばしば彼らのいる地域コミュニティのなかでは人目につかず、相当孤立し排除された状態を経験していることは明らかであった。

### 10. ALFIEは、障がい当事者団体でネットワークをつくり、未来の若き障がい者のリーダーをサポートするための指針をまとめ、よき実践を紹介するために、全国会議を主催すべきである。

ALFIEの評価するところでは、若い障がい者のリーダーシップのスキルを高めようとして取り組んでいる障がい当事者団体のコミットメントや参画の程度はさまざまに異なっている。しかしながら、そのなかで、よき実践を構成するものは何かということについて、はっきりした意見の一致はない。

私たちの調査のなかで、13 団体が若い障がい者のリーダーシップ育成に取り組んでいるが、それらの団体はすべて異なるモデルを使っている。このこと自体は問題ではないが、全般的な論議を行い、用いられた方法について、また、現地事情がどのように異なるモデルの発展を特徴づけたかということについて、議論するのは有益なことであろう。

ALFIEは、「2011 年障がい解放プロジェクト」の終わりに全国会議を開催し、この勧告を公表することにする。

ALFIEは2009年7月、ダーリントン・アソシエーション・オン・デサビリティおよびノーフォーク・コーリジョン・オブ・ディスエーブルド・ピープルに対して、私たちの調査の成果を検証し若い障がい者にかかわるリーダーシップの事業を発展させるため、二つの助成金を出した。2009年秋には、スコープの後援のもと、スコープの寄宿学校やカレッジに通学している若い障がい者にかかわるリーダーシップ事業を対象とした、三番目の助成金を出すことになっている。

これらの新しい動きは、ALFIEの現存の事業を基盤として、ロンドンのランベス区とニューハム区の若い障がい者のフォーラムを発展させる。

---

「若者が部屋の反対にいる人と同じ方法でコミュニケーションを行わないからといって、だから、彼らには言うことが何もないとか、口を開いてはいけないとかいうことではない。だからこそ、若者の声が入ってくるということがとても大切なんだ」

---



## 入手可能な関連文献

今後調査を行う人たちにとって役に立つであろう文献のリストを、以下にあげる。

同一文なかで「若い」「障がい者の」「リーダーシップ」に直接言及している文献はなかなか見つからなかった。リーダーシップに関する研究の大半は大人についてのものであり、若者のリーダーシップについての研究の大半は、スポーツのリーダーシップや、ジェンダーや文化、趣味に関するリーダーシップに関するものである。下に掲げた文献は、関連していると確認されたものである。

文献検索から重要文献はめったに見つからなかった。しかしながら、以下にあげるものは、検索パラメーターに適合していると思われた。\*

**Basis Partnership Work Phase 1 (May - July 2007)** Aspis, S. (2007).

**Career Success of Disabled High Flyers** Shah, S. (2008), Jessica Kingsley Press.

**Defying Disability** Wilkinson, M. (2007), Jessica Kingsley Press.

**Disability and Diversity: New Leadership for a New Era** Walker, S., Turner, K. A., Halle-Turner, M., Vincent, A., Miles, M. D. (1995), Presidents Committee on Employment of People With Disabilities and Howard University Research and Training Centre.

**DRC Leadership Strategy** DRC, (2006)

**Equalise It! A Manifesto for Disability Equality in Development Cooperation** UKDPC, (2008)

(<http://www.leeds.ac.uk/disability-studies/archiveuk/ukdpc/Equalise%20It%20final.pdf>)

**Leadership by People with Disabilities in Self-Determination Systems Change** Powers, L. E., Ward, N., Ferris, L., Nelis, T., Ward, M., Wieck, C., & Heller, T (2002), Journal of Disability Policy Studies

(<http://dps.sagepub.com/cgi/content/abstract/13/2/126>)

**Leadership Development Programme will support Disabled People to influence Public Life** RADAR, The Disability Network, (2008)

(<http://www.radar.org.uk/radarwebsite/RadarFiles//Documents/Press%20Releases/20080806-press-release-Radar-Leadership-Development-Days.doc>)

**Our Movement needs Leaders** Rickell, A. (2007)

(<http://www.disabilitynow.org.uk/have-your-say/andy-rickell/ourmovement-needs-leaders>)

**若い障がい者のための障がい当事者団体におけるリーダーシップを促進する際に取り上げ考慮しておくべき、全般的な障がい者問題**

**The Glass Ceiling and Persons with Disabilities** Braddock, D. & Bachelder, L. (1994), Federal Publications.

**Barriers to Independent Living: A scoping paper prepared for the Disability Rights Commission** Morris J. (2003)  
(<http://www.leeds.ac.uk/disability-studies/archiveuk/morris/independent%20living%20scoping%20paper%20final%20edit.pdf>)

**Carbon: Appointing Britons with Disabilities** Grayson, D. (2007)  
([http://www.carbonsearch.com/thecarbonreport/CF\\_Diversity\\_DavidGrayson.asp](http://www.carbonsearch.com/thecarbonreport/CF_Diversity_DavidGrayson.asp))

**Citizenship and Disabled People** Morris, J. (2005)  
([http://www.leeds.ac.uk/disability-studies/archiveuk/morris/Citizenship\\_and\\_disabled\\_people\\_final.pdf](http://www.leeds.ac.uk/disability-studies/archiveuk/morris/Citizenship_and_disabled_people_final.pdf))

**Disability, Identity and Difference** Shakespeare, T. (1996) in 'Exploring the Divide' Barnes C., & Mercer, G. (Eds.), Leeds: The Disability Press, pp. 94 - 113.

**Disability Politics: Understanding Our Past, Changing Our Future** Campbell, J., & Oliver, M. (1996), Routledge.

**Disabled People's Organisations and Developments: Strategies for Change** Hurst, R. (1999) in 'Disability and Development: Learning from action and research on disability in the majority world', Stone, E., Leeds: The Disability Press pp. 25-35.

**Disabled Students in London. A review of higher and further education, including students with learning difficulties** Greater London Authority, (2007)  
(<http://www.london.gov.uk/mayor/education/docs/disabledstudents.pdf>)

**Effecting Change: Disability, Culture and Art** Barnes, C. (2003); Paper presented at the Finding the Spotlight Conference, Liverpool Institute for the Performing Arts, University of Leeds.

**Including Disabled People** Breakthrough UK Policy, Think Tank, ODI Consultation - Equality for Disabled People, (2007)  
(<http://www.leeds.ac.uk/disability-studies/archiveuk/breakthrough/ODI%20Consultation-final.pdf>)

**Fighting for a slice, or for a bigger cake?** Campbell, J. (2008), The 6th Annual Disability Lecture, University of Cambridge St John's College

**Independent Living for People with Disabilities: from patient to citizen and customer** Ratzka, A. (2007), Invited Presentation at the Convergencia Conference, Barcelona; (<http://www.leeds.ac.uk/disability-studies/archiveuk/ratzka/2007%2010%20Barcelona%20final.pdf>)

**Internalised Oppression: How it seems to me** Rieser, R. (1990), in Rieser, R. & Mason, M. (Eds.), 'Disability Equality in the Classroom - A Human Rights Issue', London: ILEA.

**Leadership and Self-Determination** Johnson, J. R. (1999), Focus on Autism and Other Developmental Disabilities, 14 (1), pp. 4-16.

**Leadership of disabled people in Australia** Leadershipplus (2009)

**The Positive Action Leadership Programme** National Disabled Police Association (<http://www.ndpa.info/Home/palp.html>)

**One Northeast Disability Equality in Skills and Leadership**  
Action Plan 2006-2007  
(<http://www.onenortheast.co.uk/object/download.cfm?lib=liDownload&id=10511>).

**Public Policy and Organisations of Disabled People** Gibbs, D. (2005), Text of seminar presentation, Centre for Disability Studies  
(<http://www.leeds.ac.uk/disability-studies/archiveuk/Gibbs/Leeds-0504.text.pdf>)

**Leadership Radar**, The Disability Network  
(<http://www.radar.org.uk/radarwebsite/tabid/217/default.aspx>)

### **障がい者と若い障がい者の参加型意志決定の実例**

**Access to Youth Work for Disabled Young People Policy Document** Wiltshire Youth Development Service, Wiltshire County Council  
(<http://www2.wiltshire.gov.uk/high/access-toyouthwork-for-disabled-young-people.pdf>)

**A View from the Balcony: Leadership Challenges in Systems of Care** Heifetz, R., Linsky, M. & de Carolis, G. (2005), Brown Books Publishing Group.

**Developing Disabled Leaders in Essex** Adams, M. (2007)

**English Federation of Disability Sport** (<http://www.efds.co.uk>)

Listening and Responding? Children's participation in health care within England Franklin, A., & Sloper, P. (2006), in Freeman M. (ed.), 'Children's Health and Children's Rights', Martinus Nijhoff Publishers, pp. 11-29.

**Moving Forward: Progress in global disability rights** Lindqvist, B. (2007), Disability Rights Promotion International (DRPI)  
(<http://www.yorku.ca/dрпи/files/MovingForwardFINAL.pdf>)

**Supporting the Participation of Disabled Children and Young People in Decision-making** Franklin, A. & Sloper, P. (2007), Social Policy Research Unit, The University of York;  
(<http://www.york.ac.uk/inst/spru/pubs/rworks/jan2007-01.pdf>)

**Participation of disabled children and young people in decision making within social services departments: A survey of current and recent activities in England** Franklin, A. & Sloper, P. (2006), British Journal of Social Work, 36 (5), pp. 723-41.

**Participation of disabled children in individual decisions about their lives and in public decisions about service development** Cavet, J. & Sloper, P. (2004), Children & Society, 18 (4), pp. 278-90.

**Participation of disabled children and young people in decision-making within social services departments in England** Franklin, A. & Sloper, P. (2004), Research Works 2004-02, Social Policy Research Unit.

**Supporting the participation of disabled children and young people in decision-making** Franklin, A. & Sloper, P. (2009), Children & Society, 23 (1), pp. 3-15.

**Sync: Disability Leadership Development Programme** Deaf Forum (2008)  
(<http://www.deafforum.co.uk/index.php?showtopic=1998>)

**The education and employment of disabled young people - frustrated ambition** Burchardt, T. (2005), Bristol: Policy Press.

**The National College for School Leadership's commitment to good practice in employing disabled people**

**The participation of children and young people in decisions about UK service development** Cavet, J. & Sloper, P. (2004), Child: Care, Health and Development, 30 (6), pp. 613-621.

**User Driven** Hertfordshire PASS Workability, (2008)  
(<http://www.hertspass.com/workability.shtml>)

**Young Disabled People Aspirations, Choices and Constraints** Shah, S. (2008), Jessica Kingsley Press.

心を打つ障がい者—自伝／伝記。直接リーダーとして尊敬されているのではないが、以下のものはそれぞれの分野において成績優秀者として、よきロールモデルとなるだろう。

**The Blunkett Tapes: My Life in the Bear Pit** Blunkett, D. (2006), Bloomsbury.

**Blade Runner** Pistorius, O. (2009), London Virgin Books.

**Blood and Sand** Gardner, F. (2006), Bantam Press.

**Four Fingers and Thirteen Toes** Moriarty-Simmonds, R. (2007), La Fontaine Media.

**It's Not About the Bike: My Journey Back to Life** Armstrong, L. (2001), Yellow Jersey Press.

**Lucky Man: A Memoir** Fox, M. J. (2003), Random House.

**Moving Violations: War Zones, Wheelchairs, and Declarations of Independence** Hockenberry, J. (1995), Hyperion Books.

**My Life in My Hands** Lapper, A. & Feldman, G. (2006), Pocket Books.

**Nothing is Impossible: Reflections on a New Life** Reeve, C. (edited by K. Parkin) (2002), Century.

**Seize the Day: My Autobiography** Grey-Thompson, T. & Broadbent, R. (2002), Coronet Books.

**The Diving-Bell and the Butterfly** Bauby, J.-D. (1997), HarperPerennial.

### 若いリーダーに対する事業の例

#### **The Football Association**

(<http://www.thefa.com/GetIntoFootball/School/NewsAndFeatures/2007/YoungLeadership07.aspx>)

**Northern Leadership Academy** The Sixth Yorkshire Leadership Conference 2009

#### **Scotland Leadership for Girls**

(<http://www.youthscotland.org.uk/training/girls-on-the-move/leadership-courses/girls-on-the-move-leadership-courses.htm>)

**Sports Leaders Programme** (<http://www.sportsleaders.org/>)

**The Churches for All Partnership**

([http://www.churchesforall.org.uk/all\\_organisation.html](http://www.churchesforall.org.uk/all_organisation.html))  
Young Muslims (<http://www.da.mod.uk/spotlights/youngmuslim-leadership-course-20th-may-2008/>)

**Young People Leading Change**  
([www.teachernet.gov.uk/publications](http://www.teachernet.gov.uk/publications))

\* 2009年12月16日にネット上で確認。

## 参加協力者一覧

ご協力いただいたすべての方に、深く感謝いたします。（また、何か漏れや誤りがありましたら、申し訳ありません）

### 若者：

Abigail Adams, Andrew Bird, Aqeed Mahmood, Ashley Baker, Brandon Aughton, Carezza Woode, Chi Kunkanpanda, Craig Gibbs, Darren, David, Dominic Findlay, John, Kate Caryer, Katie Fraser, Lara Cowderdale, Luc Eisenbath, Marcus, Maresa Mackeith, Maria Freitas, Miro Griffiths, Natalie, Nathan, Oliver Wood, Patrick Fitzgerald, Patrick Kimber, Poppy Goodchild, Richard Dunham, Richard Stewart, Rosie Knight, Sarah, Simone Tomlinson, Toby Morrison, Zara Todd

### 障がい当事者団体および自立生活センター：

**Alex Brining** Richmond AID (Advice and Information on Disability)  
**Alison Scally** Barking and Dagenham Centre for Independent, Integrated, Inclusive Living Consortium  
**Angela Dias** Harrow Association of Disabled People  
**Angela Wegener** DASH (Disability Advice Service Hillingdon)  
**Annie Davis** WECIL (West of England Centre for Independent Living)  
**Bidwantee Jugnauth** Marigold Training  
**Bill Cummings** Open Roads  
**Caroline Golding** Norwich Coalition of Disabled People  
**Carol Pearson** Surrey Coalition of Disabled People  
**Cathy Wintersgill** Connect in the North  
**Christine Bennett** Independent Living Schemes (York)  
**Clive Durdle** Redbridge Disability Association  
**David Stock** Southwark Disablement Association  
**David Strong** Disability Advice Service, Lambeth  
**Dawn Clarke** Disability Information & Advice Centre  
**Dawn Gerrard** Warrington Disability Partnership  
**Dee Martin** Leicestershire CIL  
**Dianne Cowen** Disability North  
**Edward Tetbury** Disability Network Hounslow  
**Elsa Becket** Gemma  
**Emma Treby** Living Options  
**Ian Loynes** Southampton Centre for Independent Living  
**Inge Reynolds** ILA (Independent Living Alternatives, West Sussex)  
**Jane Sharps** Disability Cornwall  
**Joan Walker** Central England People First Ltd  
**Jo Ritson** South Yorkshire Centre for Independent Living  
**Kate Larsen** Shape  
**Kamran Mallick** HAFAD (Hammersmith and Fulham Action on Disability)

**Laura Capon** PRO Disability  
**Lauren Robinson** Darlington Action on Disability  
**Lesley Windle** Spelthorne Committee for Access Now  
**Lynne Rigby** Portsmouth Disability Forum  
**Margaret Williams** RP Fighting Blindness  
**Marilyn Robinson** Ideal for All  
**Nigel Fenner** Hertfordshire PASS  
**Paul Treloar** Disability Alliance  
**Pete Crane** Lancashire CIL  
**Phil Gosling** BM REGARD  
**Phil Samphire** Greater Manchester Coalition of Disabled People  
**Rachel Twomey** NCIL (National Centre for Independent Living)  
**Richard Boyd** Disability Essex  
**Richard Downes** Brent Advocacy Concerns  
**Rubben Aurangzeb-Tariq** DEWA (Deaf Ethnic Women Association)  
**Ruth Bashall** Disability Action Waltham Forest  
**Sandra Bell** Ability Northants  
**Sophie Turley** Unity 12 CIC Ltd  
**Steve Bird** Disability Cornwall  
**Susie Balderston** Vision Sense  
**Theo Harris** KCIL (Kingston Centre for Independent Living)  
**Tracey Jannaway** Independent Living Alternatives  
**Simone Aspis** Alliance for Inclusive Education

**ビッグ・マインド・ビッグ・ライフ・イベント時のファシリテーター、支援者、PA :**  
Angela Baker; Dzifa Afonu; Eden Louis Marie; Hugh Hill; Jenny O'Mahony; Joshua Green; Kevin Caulfield; Kolsoma Begum; Lucy Mason; Madeleine Denny; Mal Robinson; Michael Goodey; Michele Abramo; Midge Caryer; Moeva Rinaldo; Phil Fuller; Sebastian Glover; Selena Grogan; Steve Bird

また、校正、編集及び論評で、Linda Shaw および Stefan Szczelkun にお世話になりました。

## 附録 1

今回調査に参加したなかで、現在若い障がい者にかかわる事業を行っている障がい当事者団体の一覧

### Central England People First Ltd.

学習障がいを持つ若い障がい者を、アドボカシーや相談のイベントに参加させている。

[www.peoplefirst.org.uk](http://www.peoplefirst.org.uk)

### Darlington Association on Disability

若い障がい者を経験によって専門家として雇用し、地域の若者議会とつながって、人権をベースとした情報や助言事業、ピアモニタリングや、他の多くの、特に若者にかかわる活動やサービスを見つけて携わるよう、若者大使を発展させている。[www.darlingtondisability.org](http://www.darlingtondisability.org)

### Disability Cornwall

マッチ・ファンドで特別支援学校やデイセンターや通常教育のなかで学んでいる障がい児と共に活動する、障がい者スポーツの地域指導者を抱えている。彼らはまた、若い障がい者が若者のパートナーシップ委員会の設立を通して選択と管理を行うように支援するプランを持っている。[www.disabilitycornwall.org.uk](http://www.disabilitycornwall.org.uk)

### Essex Disabled People's Association Ltd.

事務作業の訓練を提供し、エセックスの120の地域の障がいクラブにボランティアとして参加できるようにしている。[www.disabilityessex.org](http://www.disabilityessex.org)

### Hammersmith and Fulham Action on Disability

若者プログラムについてのスケジュールを持っている。この若者プログラムは、余暇や、教育、社会的機会を利用する方法を提供し、包括的なサービスを促進し、発展の道筋を進展させ、障がい者の家族に支援を提供し、自立生活のスキルなどを教えるものである。若者が資金調達の申請を首尾よく達成し、便利なレコーディング・スタジオを開始した。

[www.hafad.org.uk](http://www.hafad.org.uk)

### Hertfordshire Personal Assistant Support Service (PASS)

若い障がい者に仕事体験の機会を提供するユーザー主導型の事業である「ワーカビリティ」を行うための実習生として、3人の若い障がい者を雇用している。彼らは要求される仕事の大半を行うなかでリーダーの役割を担ってきた。PASSは、「ユーザー主導」という、ワーカビリティについて丁寧に詳述した本を発行している。この本には、スタッフを任命したり、コミュニティで活動する際のプロセスについて、そして、ユーザー主導の団体とは何を意味するかということも書かれている。詳しくは、文献検索でご参照いただきたい。

[www.hertspass.com](http://www.hertspass.com)

### Ideal for All

特に16歳から25歳の人にかかわって、彼らが求人市場に近づくことができるようにする専任スタッフが一人いる。この事業は、若者が社会的経済的に積極的になれるよう勇気づけ、団体の運営に関するリーダーシップのスキルを発達させて、給付金への依存を減らすことを目的としている。「私たちの若者のための事業は、Ideal for Allのユーザー主導型の理念

を映している。この事業は若い障がい者からなる運営グループにより実行されている。議長は 25 歳の女性の障がい者である」とのことである。[www.idealforall.co.uk](http://www.idealforall.co.uk)

### **Manchester Coalition of Disabled People**

若い障がい者のフォーラムがあり、若い障がい者を勇気づけ、リーダーシップのスキルを高めることなどを目的とした幅広い活動を主催している。例として、グループミーティングや、ピアモニタリング、自立生活訓練、情報およびアドボカシー、課題を基にしたドラマプレゼンテーションを行っている。また、運営委員会には 3 人の若者がいる。[www.gmcdp.com](http://www.gmcdp.com)

### **Marigold Training**

リーダーシップのスキル発展を促進するために設けられた訓練コースを提供している。[www.marigoldtraining.com](http://www.marigoldtraining.com)

### **Portsmouth Disability Forum**

若い障がい者に対して、就職のあっせんを提供している。[www.p-d-f.org](http://www.p-d-f.org)

**Shape** は、「はっきりと話す」プログラムを進めるために、学習障がいを持つ 16 歳から 25 歳の若者の運営グループを作ろうとしているところである。[www.shapearts.org.uk](http://www.shapearts.org.uk)

### **Vision Sense**

憧れワークショップや、若者理事の訓練、仕事体験や実習、障がい当事者団体の歴史における訓練、障がい者の権利と選択、自立生活、そして、助言と情報を提供している。また、地域の若者グループがインクルーシブで近づきやすいものになるように支援している。

[www.visionsense.co.uk](http://www.visionsense.co.uk)

### **Warrington Disability Partnership**

専任の若者の開発ワーカー（自身障がい者である若い女性）が一人いて、若い障がい者がリーダーシップ開発の活動に参加できるような様々な機会を提供している。そのなかには、若者大使プロジェクトや、レジャー、レクリエーションやスポーツ、青少年クラブがある。さまざまな資金提供者や提携団体、地域の学校やカレッジなどと共に事業を行っている。

[www.disabilitypartnership.org.uk](http://www.disabilitypartnership.org.uk)

## 附録 2

### ロールモデルとして登場した障がい者の方のリスト

**Maresa MacKeith** - ファシリテーター・コミュニケーションを用いる非言語の人々のために活動している若い障がい者、Young and Powerful の元メンバー、One for All の共同創設者

**Lucia Bellini** - 若い障がい者の活動家、Young & Powerful の元メンバー

**Zara Todd** - 若い障がい者の活動家、Equality 2025 の副議長

**Phil Samphire** - Greater Manchester Coalition of Disabled People のプロジェクト職員

**Owen Parry** - Hertfordshire Personal Assistant Support Service の議長

**Nick Saunders** - 障がい平等とインクルージョンの活動家

**Micheline Mason** - Alliance for Inclusive Education の創設者、インクルージョンの活動家

**Chrissie Wilson** - 障がい者インクルージョンの活動家

**Chris O'Mahony** - 障がい平等とインクルージョンの活動家

**Simone Aspis** - 障がい平等とインクルージョンの活動家

**Daniel Bentley** - パラリンピックの選手

**Ellie Simmonds** - パラリンピックの水泳選手

**Alison Lapper** - アーティスト/テレビパーソナリティー

**David Blunkett** - 労働党議員

**Gordon Brown** - 英国首相

**Bert Massie** - Office for Disability Issues, Commission for Equality and Human Rights の議長

**Mick Scarlet** - 障がい者のテレビプレゼンター/DJ

**Oscar Pistorius** - パラリンピックの選手

**Liz Carr** - 障がい者の女優/女性コメディアン

**Dame Tanni Grey-Thompson** - パラリンピックの選手/スポーツパーソナリティー

**Lara Masters** - コラムニスト/テレビプレゼンター

**Mike Oliver** - 障がい者権利活動家、作家、大学教員

**Baroness Jane Campbell, DBE** - Equality & Human Rights Commission 理事

**Anne McDonald** - 非言語コミュニケーターのためのオーストラリア人障がい者権利活動家

**Jacqui Christy James, MBE** - the International Disability and Equality Agency の創立者で共同ディレクター

**Rachel Hurst, CBE** - Disability Awareness in Action の理事長

**Tara Flood** - 障がい者権利活動家、Alliance for Inclusive Education の理事長

**Richard Rieser** - Disability Equality in Education の所長、インクルージョンの活動家

**Andrew Lee** - National People First (学習障がいを持つ人たちのためのアドボカシーを行う全国的な団体) の理事長

**Council for Disabled Children** - イングランド全土における政府による障がい児のためのネットワーク

**The Priority Trust** - 障がい児の自立を促進する慈善事業

**Whizz-Kidz** - 移動の援助の提供などを行い障がい児を支援する、英国全土にわたる慈善事業

**1Voice** - 通信器を使っている障がい児やその家族に対して支援と情報提供を行うネットワーク

## 附録3

### 「ビッグ・マインド・ビッグ・ライフ」イベントプログラム 2009年2月

時間	活動
10.30	開始
11.00	登録
11.11	ドラムの音で導入+ドラム演奏の指揮を経験してもらい、それがどんな感じだったか言ってもらおう
11.30	リーダーって、どんなもの？ - 丸いかたちを描く - 良いリーダーと悪いリーダーのタイプを分ける
12.00	あなたの周囲に、リーダーと思える障がい者がいますか。二つか三つのグループに分けて、よく考える - フリップチャートのメモ用紙に書いて、両方を比べる
12.30	あなたは、自分のことを「リーダー」だと思えますか。「はい、いいえ、多分」
練習 - 質問を見なさい	
1:00	昼休み
1.30	大人の障がい者や障がい者団体は、あなたに自分のことをリーダーと思えるように支援してくれたり、リーダーシップのスキルを発達させてくれましたか。それは、どのようにしてですか。 大人の障がい者や障がい者団体が、あなたをがっかりさせたことはありますか。それはどのようにしてですか。 大人の障がい者や障がい者団体が、あなたのリーダーシップのスキルを発展させるために、支援できることが何かありますか。
フォーラム演劇 - 問題：大人が難しい言葉で話している - 資金集めのための空欄に印を入れるだけのために集会に誘ってくる。大人の障がい者が若い障がい者を戸惑わせる、昔からよくある対立。仕事に出る経験 - 無視される、酷使されるなど。	
3.00	若い障がい者やリーダーシップについて、何か他に言いたいことはありませんか。
3.45	お別れと評価
<b>準備物</b>	
10.30	明かり、布、映像、ブルータック、タックなど
11.00	リリースフォーム 登録フォーム
11.11	ドラム
11.30	フリップチャートのメモ用紙、テープ、ペンなど コラージュに使う画像

12.30 質問と移動するための部屋

1.00 食べ物、飲み物、皿、コップ、ナイフやフォークなど

3.00 フリップチャートのメモ用紙、ペンなど

**三択質問（はい、いいえ、多分で答える）**

1. 誰でもリーダーになれますか。
2. リーダーになるためには、話せないといけないでしょうか。
3. リーダーであるということは、何もかも自分でしないとけないということでしょうか。
4. リーダーになるためには、部下が要りますか。
5. 若者はリーダーになれますか。
6. リーダーは、他の人たちの行動に責任があるでしょうか。
7. あなたは、自分がリーダーだとわかっていないといけませんか。
8. リーダーは、しんどい仕事を全部しなければならないでしょうか。
9. リーダーは、いつもたった一人だけですか。
10. リーダーシップを分かち合うことはできますか。

## 附録 4

### 「良いリーダー」「悪いリーダー」の特質のリスト

若い障がい者は、次のような人を「良い」リーダーであると評価した。すなわち、次のようである。

#### 社会的正義を促進する

- コミュニティに意識を向けている
- 運動に打ち込み身をささげている
- 公平である
- どんな人も排除しない
- 他の人たちの代弁者として行動する - コミュニティーへの声となる

#### 人々の采配がうまい

- やる気を促す
- すぐれた管理能力を持っている
- うまく動機づけできる
- 人々に何を願えばよいか知っている
- 何かが起こるようにしてくれる
- チームの他のメンバーの力と弱さを知り、適当な支援を差し出す
- 人々の努力に感謝し称賛する

#### 他の人を力づける

- 他の人を思いやる
- 他の人たちを励ます
- 高い期待を持っている
- 他の人たちが達成目標に到達するのを手助けする
- 他の人たちが能力を発揮できるよう手助けする
- 分かち合う／考えを共有する
- 支えてくれる
- 支援が必要な人たちを支援する

#### 特別な個人的な性質／スキルを持っている

- 自分の知性を使うことができる
- 断固としている
- やる気である
- コミュニケーションが上手に取れる
- 性格がいい
- 人の気持ち・感情を理解できる
- 知識が豊富である
- 自分がどこに向かっているか知っている - はっきりした方向性
- まめである、問題解決能力が高い、頼りがいがある、柔軟性がある
- ちゃんと話を聞いてくれる／礼儀正しい
- 責任感がある

指導力を発揮する  
勉強熱心である  
一生懸命に働く

障がい当事者団体は、障がい者の「リーダー」を、以下のことを一つあるいは一つ以上行う人であると認めている。

社会的正義を促進する

平等と多様性を擁護する  
障がい者の権利  
自立した生活  
人間中心の変革

個人のニーズを理解する

社会モデルを使う

チェンジ・エージェント（変化を起こす媒体となる人）／運動家

有能な活動家

自身のために語り他の人を代弁する

人々の采配がうまい

状況を支配する  
グループのなかで主導権を握る  
計画を立てる  
与えられた課題を理解し、皆がそれに取り組むよう保証する

他の人を力づける

ロールモデル  
意欲を起こさせる  
励ます  
発展させる  
ピアサポート（仲間同士での支え合い）を提供する  
世界を変革しようと他の人たちを鼓舞する  
他の人たちを団結させる

特別な個人的な性質／スキルを持っている

熱心である  
突き動かされている  
情熱的である  
自信に満ちている  
やる気がある  
尊敬されている

## 附録 5

### 質問票

#### 自立生活センターや障がい当事者団体に向けての質問票

お名前：

肩書き：

団体名称：

ご住所：

メールアドレス：

電話番号：

1. 貴団体では、若い障がい者を対象とする事業を何か行っていますか。
2. はい - 質問 2 に進む  
(ア) いいえ - 質問 5 に進む
3. 貴団体で行っている若い障がい者を対象とする事業について、説明して書いてください。
4. その事業は、どのような資金で行われているのでしょうか。
5. あなたのお考えでは、若い障がい者を対象とするその事業は、リーダーシップのスキルを促進／発展させますか。それはどのようにしてですか。
6. 貴団体で若い障がい者を対象とする事業を行っていない理由が何かありますか。
7. あなたのお考えでは、障がい者の「リーダー」とは何でしょう。
8. 貴団体のなかで、リーダーシップの役割を担っている若い障がい者はいますか。
9. 貴団体のなかで、若い障がい者がリーダーシップを担おうとする際にバリアとなるものがあれば、それをすべて書いてください。

#### 参加した若い障がい者への質問票

1. あなたにとって、「リーダー」とは何を意味しますか。

2. リーダーとあなたが思うような障がい者は、誰かいますか。
3. あなたは自分のことを「リーダー」だと思えますか。
4. 若い障がい者のリーダーならどんなことをするだろうとあなたは思いますか。
5. あなたが自分自身のことをリーダーと考えたり、リーダーシップのスキルを発展させるために、大人の障がい者や障がい当事者団体は支援してくれたことがありますか。それはどのようにして行われましたか。
6. 大人の障がい者や、障がい当事者団体があなたをがっかりさせたことがありますか。それはどのようなことでしたか。
7. あなたのリーダーシップのスキルを発展させるために、大人の障がい者や、障がい当事者団体が何か支援できるようなことはありますか。
8. 若い障がい者とリーダーシップについて、何か他に言いたいことがありますか。

変化を起こせ (c) 2013

---

未来を担う若い障がい者リーダーを育てるために障がい当事者団体にできること

2013年3月10日発行

編者 The Alliance for Inclusive Education

訳者 豊高明枝・土井圭子

発行者 放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」

c-k@love-dugong.net

---

この冊子は、大阪府福祉基金からの助成を受けて作成しました。



「リーダーであるということは、  
変化を起こそうとしていくこと。

立ち上がり、ほかの人がやらなかったことを、  
しようとする事。

状況を見て、それを変化させたいと思うこと。

そして、ほかの人を励まして、  
同じようにしようという気にさせること。

自分の経験を用いて、ほかの人を力づけ、  
その人自身のリーダーシップ精神を動き出させる  
ことなのです」

参加した若い人のことば

The Alliance for Inclusive Education  
336 Brixton Road  
London SW9 7AA

日本語訳：放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」